ユネスコスクール
活動事例集

第12集

愛知県

愛知県教育委員会

目　次

特集 ESDとSDGs		2
ユネスコスクール 活動事例①	愛知教育大学附属岡崎小学校	4
ユネスコスクール 活動事例②	豊橋市立八町小学校	6
ユネスコスクール 活動事例③	豊橋市立西郷小学校	8
ユネスコスクール 活動事例④	豊橋市立玉川小学校	10
ユネスコスクール 活動事例⑤	田原市立衣笠小学校	12
ユネスコスクール 活動事例⑥	名古屋大学教育学部附属中・高等学校	14
ユネスコスクール 活動事例⑦	愛知県立愛知商業高等学校	16
ユネスコスクール 活動事例⑧	愛知県立豊田東高等学校	18
ユネスコスクール 活動事例⑨	愛知県立刈谷北高等学校	20
ユネスコスクール 活動事例⑩	名古屋市立北高等学校	22
ユネスコスクール 活動事例⑪	名古屋市立山田高等学校	24
ユネスコスクール 活動事例⑫	名古屋市立名東高等学校	26
ユネスコスクール 活動事例⑬	名古屋経済大学市邨高等学校	28
ユネスコスクール 活動事例⑭	中部大学第一高等学校	30
ユネスコスクール 活動事例⑮	日本福祉大学付属高等学校	32
ユネスコスクール 活動事例⑯	認定特定非営利活動法人 愛知シュタイナー学園	34
愛知県ユネスコスクール交流会		36

はじめに

ユネスコスクールは、ESDの推進拠点としても位置づけられ、ユネスコ憲章に示されたユネスコの理想を実現するため、1953（昭和28）年に創設された、①地球規模の問題に対する国連システムの理解、②人権、民主主義の理解と促進、③異文化理解、④環境教育、といったテーマについて、質の高い教育を実践する学校です。世界には182か国で約12,000校以上のユネスコスクールがあり、日本国内では、1,088校（2024（令和６）年４月現在）が加盟しています。愛知県では、2014（平成26）年11月に名古屋市で開催された「持続可能な開発のための教育（ESD：Education for Sustainable Development）に関するユネスコ世界会議」を契機としてユネスコスクールへの加盟が進み、現在申請中・キャンディデートを含め91校が活動しています。

2015年９月25日第70回国連総会で採択された『我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ』の「宣言」では、SDGsが目指す世界像の一つに、「子供たちに投資し、全ての子供が暴力及び搾取から解放される世界」が挙げられています。また、このアジェンダの歴史的意義として「子供たち、若人たちは、変化のための重要な主体」であることが明記されており、子供たちに対して、教育をはじめとする様々な学びや体験などができる環境を整えることが重要です。

愛知県教育委員会では、児童生徒・学生・教員等が交流し、学び合う「ユネスコスクール交流会」を「SDGs AICHI EXPO 2024」の中で開催し、各校の取組成果を発表するとともに、SDGs達成に向けて取り組む団体とつながる機会としました。また、ユネスコスクールへの講師派遣や、管理職・ESD実践担当者等を対象としたESD・SDGs推進指導者研修会を、オンラインを併用したハイブリッド型で実施し、ユネスコスクールの活動の質的向上と、ユネスコスクール同士の交流を目的とした支援事業を行っています。

本事例集は、ESDの推進拠点であるユネスコスクールに加盟する県内の学校実践をまとめたものです。学習指導要領の前文及び総則においては、「持続可能な社会の創り手」の育成が掲げられ、各教科指導においてもESDの視点での授業改善が求められています。ユネスコスクール加盟の有無を問わず、全ての学校においてESDの充実と広がりへとつながり、未来を担う子供たちの学びに向かう力を育むきっかけとなることを願っています。

結びに、本事例集作成にあたり、御協力いただいたユネスコスクールの先生方、及び関係市町村教育委員会を始めとした関係の皆様に心より感謝を申し上げます。

2025（令和７）年３月

愛知県教育委員会

特集 ESDとSDGs

ESDとは

ESDとは「Education for Sustainable Development」の頭文字を取ったもので、日本語では「持続可能な開発のための教育」と訳されています。

今、世界には気候変動、生物多様性の喪失、資源の枯渇、貧困の拡大等人類の開発活動に起因する様々な問題があります。ESDとは、これらの現代社会の問題を自らの問題として主体的に捉え、人類が将来の世代にわたり恵み豊かな生活を確保できるよう、身近なところから取り組む（think globally, act locally）ことで、問題の解決につながる新たな価値観や行動等の変容をもたらし、持続可能な社会を実現していくことを目指して行う学習・教育活動です。つまり、ESDは持続可能な社会の創り手を育む教育です。

（出典：文部科学省「持続可能な開発のための教育」https://www.mext.go.jp/unesco/004/1339970.htm）

ESDで目指すこと

・持続可能な社会づくりを構成する「６つの視点」を軸とし、教員・生徒が持続可能な社会づくりに関わる課題を見出します。

1．多様性（いろいろある）
2．相互性（関わりあっている）
3．有限性（限りがある）
4．公平性（一人一人大切に）
5．連携性（力合わせて）
6．責任制（責任を持って）

・持続可能な社会づくりのための課題解決に必要な「７つの能力・態度」を身に付けさせます。

1．批判的に考える力
2．未来像を予測して計画を立てる力
3．多面的・総合的に考える力
4．コミュニケーションを行う力
5．他者と協力する力
6．つながりを尊重する態度
7．進んで参加する態度

（出典：文部科学省「持続可能な開発のための教育」https://www.mext.go.jp/unesco/004/1339970.htm）

ESDとSDGs

SDGsは「持続可能な開発のための目標」のことで、17の目標と169のターゲットから構成されています。

ESDは、このうち、目標４「全ての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯教育の機会を促進する」のターゲット4.7に位置づけられました。

4.7　2030年までに、持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和の文化及び非暴力の推進、グローバル・シチズンシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育をとおして、全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする。

ESDは、ターゲットのひとつとして位置づけられているだけでなく、SDGsの17全ての目標の実現に寄与するものであることが2017年12月の第72回国連総会において確認されています。持続可能な社会の創り手を育成するESDは、持続可能な開発目標を達成するために不可欠である質の高い教育の実現に貢献するものとされています。

（出典：「持続可能な開発のための教育（ESD）推進の手引」（令和3年5月改訂版））

ESD・SDGsの変遷

1987	国連ブルントラント委員会で、「持続可能な開発（SD）」の概念が提唱
1992	国連環境開発会議（地球サミット）において、持続可能な開発についての行動計画「アジェンダ21」に教育の重要性が盛り込まれた
2000	（9月）　国連ミレニアム・サミットにおいて、「ミレニアム開発目標（MDGs）」採択
2002	（9月）　ヨハネスブルグ・サミットにおいて、日本からESDの10年を提案し、持続可能な開発に関する世界首脳会議実施計画に盛り込まれた（12月）　第57回国連総会にて、日本から2005年から2014年までを「国連ESDの10年（DESD）」とする旨の決議案を提出し、満場一致で採択
2005～2014	「国連ESDの10年（DESD）」を実施
2013	第37回ユネスコ総会において、「持続可能な開発のための教育（ESD）に関するグローバル・アクション・プログラム（GAP）」が採択
2014	「持続可能な開発のための教育（ESD）世界会議」が、日本及び国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）の共催により開催 ・11月4日から8日まで（岡山市）　ステークホルダーの主たる会合 ・11月10日から12日まで（名古屋市）　閣僚級会合及び全体のとりまとめ会合 「ユネスコスクール世界大会 Student（高校生）フォーラム共同宣言」、「あいち・なごや宣言」などを採択
2015	（9月）　国連サミットにおいて、持続可能な開発目標（SDGs）採択
2015～2019	「持続可能な開発のための教育（ESD）に関するグローバル・アクション・プログラム（GAP）」を実施
2016	（12月）　中央教育審議会の答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」に、「持続可能な開発のための教育（ESD）は次期学習指導要領改訂の全体において基盤となる理念である」と明記
2017	第72回国連総会において、「ESDは全ての持続可能な開発目標（SDGs）の実現の鍵である」旨を再確認
2017・2018	（2017年3月：幼・小・中、2018年3月：高）　公示された学習指導要領において、全文及び総則に「持続可能な社会の創り手」の育成が掲げられた
2019	（11月）　第40回ユネスコ総会において「持続可能な開発のための教育：SDGs実現に向けて（ESD for 2030）」が採択
2020～2030	「持続可能な開発のための教育：SDGs実現に向けて（ESD for 2030）」を実施

愛知教育大学附属岡崎小学校

住　所：〒444-0072 岡崎市六供町字八貫15
連絡先：TEL 0564-21-2237　FAX 0564-21-2937
H　P：https://www.op.aichi-edu.ac.jp

創　立：1901年
学級数：18
児童数：531人

生物多様性　海洋　**減災・防災**　気候変動　**エネルギー**　**環境**　**文化多様性**　世界遺産・無形文化遺産・地域の文化財等
国際理解　平和　人権　ジェンダー平等　福祉　**持続可能な生産と消費**　健康　**食育**　貧困
エコパーク　ジオパーク　グローバル・シチズンシップ教育（GCED）　その他関連分野

自ら問題を見つけ、解決していく子供の育成

はじめに

本校では、ESDを生活の中から問題を見つけ、主体的に解決していくものと捉えており、粘り強く主体的な学び方を身に付けることができる問題解決学習を展開している。そして、ESDの実践をとおして、子供たちが、各教科で求める姿に迫っていくことを目標としている。今年度は、持続可能な生産と消費に係わる活動、国際理解に係わる活動、防災に係わる活動を行った。

実践内容❶
「自動車部品から生まれる野菜たち」

ねらい：清水さんの環境をよくしたいという思いに迫り、未来のための取組であると気づくことができる。

自動車部品を扱う清水フェルト工業の清水幹夫さんに出会った子供たちは、清水さんが部品の端材でファイバーソイルを製造していることを知った。また、そのファイバーソイルを使って野菜作りを行っていることも知り、どうして清水さんはファイバーソイルで野菜作りをしているのか問いをもった。子供たちは、清水さんがファイバーソイルで野菜作りを行う理由を明らかにするために、清水さんや、農家、清水さんと協力している企業、市役所などに繰り返しインタビューを行っていった。そして、自動車部品を作る際に出る廃棄物をなくすためにファイバーソイルを製造していること、それを用いて野菜を作ることで多くの人に、環境に配慮した取組を知ってもらいたいという清水さんの思いを知ることができた。また、ファイバーソイルの軽量で虫がつくにくいなどの利点は、高齢者が多い農家を助けること、自社の技術を生かした取組は、中小企業のモデルになる可能性があるとも考えるようになっていった。そして、清水さんの取組は、未来を生きる自分たちのために、少しでも環境をよくしたいという願いが込められた活動であると価値を感じることができた。

どうしてピーマンができるのかな

成　果

清水さんが、ファイバーソイルで野菜作りを行う理由について、清水さんだけでなく、協力する人々の立場からも考察することで、環境に優しい仕事をしたいという清水さんの思いに迫り、未来のためにフェルトで新しい分野に挑戦し続けているという社会的意義について考えることができた。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
1 貧困をなくそう　2 飢餓をゼロに　3 すべての人に健康と福祉を　4 質の高い教育をみんなに　5 ジェンダー平等を実現しよう　6 安全な水とトイレを世界中に　7 エネルギーをみんなに そしてクリーンに

実践内容❷

「分かりやすく伝えたいな　おにぎりの魅力」

お気に入りのおにぎりを伝えるよ

ねらい：外国の人との食文化の違いに気づき、文化的背景に配慮しながら、発表内容や伝え方を考える。

近年、日本のおにぎりが外国の人に人気があることを知った子供たちは、１学期に交流した留学生が再度交流したいと思っていることを知り、留学生に自分のお気に入りのおにぎりをプレゼンテーションしたいという思いをもった。子供たちは、お気に入りのおにぎりの魅力が伝わるように英語表現や伝え方を考えた。実際に留学生と交流し、うまくいったことや困ったことについて振り返る中で、留学生に魅力を分かりやすく伝えるためにはどのようにしていけばよいのかを考えるようになった。そして、自分たちと留学生との文化的な違いから、留学生の文化的背景に配慮した視点からプレゼンテーションの内容を考え、伝えることができるようになった。

成　果　留学生との２回目の交流会では、留学生から「教えてもらったおにぎりを食べてみたい」「日本の食べ物がよく分かった」という感想をもらうことができた。子供たちは、プレゼンテーションへの満足感だけでなく、留学生とのやりとりから楽しさを味わうことができた。

実践内容❸

「増やしたいな　いつか活躍する　ふぞくっ子」

避難グッズを選んで、バッグに詰めてみるよ

ねらい：防災ワークショップの運営をとおして、災害に備えた自助・共助の意識を大切にすることができる。

夏季休業中の地震の話題をきっかけに、岡崎市のハザードマップで南海トラフ地震の可能性や規模を知った子供たちは、被災経験者の話を聴くことで、自分たちの知識や経験を伝え、災害時に考えて行動できる仲間を増やしたいという切実感をもって動き出した。どうすれば、参加者が危機感を高めてくれるのか、どうすれば自分たちで考えて行動できるようになるかを何度も話し合い、４～６年生を対象にした防災ワークショップの運営に向けて準備を進めた。当日のワークショップでは、実際に避難グッズを選んで防災バッグに入れる体験や岡崎市の被害想定である震度６弱の揺れを感じてもらう体験、避難所での生活スペースの疑似体験など、九つのグループに分かれて運営をした。

成　果　参加者からは「いつか被災者になることを知り、命に関わることだと気づいた」「誰かがやってくれるから大丈夫と思っていたけど、自分でも活用していきたい」などの感想が聞かれ、子供たちは自分たちの活動に達成感を感じることができた。

おわりに

これまで本校が大切にしてきた、生活の中から問題を見つけ、主体的に解決していく子供の育成を2025年度も継続して目指していきたい。その中で、相互理解の精神を育む「共生教育」も、活動テーマとしてさらに進めていきたい。具体的には、愛知教育大学、附属岡崎中学校・附属特別支援学校との連携を強化し、行事での交流、授業での交流、農園での共同作業、休み時間や給食の自由交流、学校行事での交流などを行うことを考えている。これらの活動をとおして様々な人とふれあうことで、子供たちに共に生きることを学ばせたい。

豊橋市立八町小学校

住　所：〒440-0806 豊橋市八町通五丁目5番地
連絡先：TEL 0532-52-1184　FAX 0532-57-1972
H　P：https://www.toyohashi-c.ed.jp/hacchou-e/

創　立：1873年
学級数：15
児童数：304人

生物多様性　海洋　**減災・防災**　気候変動　エネルギー　環境　**文化多様性**　**世界遺産・無形文化遺産・地域の文化財等**
国際理解　**平和**　**人権**　**ジェンダー平等**　**福祉**　持続可能な生産と消費　**健康**　**食育**　貧困
エコパーク　ジオパーク　**グローバル・シチズンシップ教育（GCED）**　その他関連分野

国際的な視野でふるさとを愛する地球市民の育成

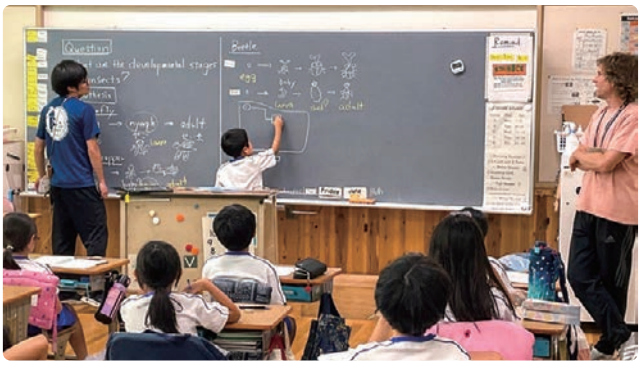
はじめに

本校は豊橋市の中央に位置し、150年の歴史をもつ伝統校である。2014年にユネスコスクールへ加盟承認され、今年で10年目を迎えた。「国際的な視野を持ち、ふるさとを愛する地球市民の育成」をテーマに、地域の歴史や伝統、文化を継承し、特色あるカリキュラムを創造している。また、地域と共に歩む「コミュニティ・スクール」として、多彩な活動を展開している。その中から特に注目すべき三つの実践を紹介する。

実践内容❶
「イマージョン教育の推進（公立小学校全国初）」

ねらい：「英語（で）」学ぶことで、多文化共生やグローバル社会で活躍できる子供を育成する。

本校は、教科の授業を英語（で）行う公立小学校として、全国初のイマージョン教育コースを併設し、5年目を迎えている。「イマージョン」とは「（英語に）浸る」という意味で、授業を通じて英語のリスニング能力が大きく向上し、英語で話す力のレベルアップも期待できる。多文化共生やグローバル社会で活躍できる児童の育成を目指し、日本人教員（JTE）とネイティブスピーカーの教員（NET）がペアを組んで授業を行っている。通常の教科書に加え、英語に翻訳されたデジタル教材やワークシートを活用し、必要に応じて日本語と英語を行き来しながら進める形式である。また、海外の小学校とも連携し、希望者を対象に教育課程外でオンライン交流会を実施している。現地校を指導する大学の先生がファシリテーターを務め、児童同士の交流を促進している。回数を重ねるにつれ、児童たちは積極的に海外の子供たちとコミュニケーションを図れるようになり、自信を深めている。



英語（で）行う理科の授業

成　果

英語の授業ではなく、算数などの教科を「英語（で）」学ぶことで、自然に英語が身に付いている。英語について間違いが指摘されることはないので、多くの児童が英会話に積極的に取り組んでいる。また、帰国子女やネイティブの先生が多く在籍しており、児童たちは自然に多文化共生の感覚を身に付けている。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

実践内容❷

「地域の伝統文化「人形浄瑠璃体験」（3年生）」

豊城中人形浄瑠璃部から学ぶ

ねらい：郷土の文化にふれ、郷土の文化に誇りをもち、郷土を愛する心を育成する。

3年生の総合的な学習の時間に、400年以上の歴史をもつ地域の伝統文化「飽海人形浄瑠璃」の体験会を実施している。地域の「吉田文楽保存会」の方々を講師に迎え、講座を行っている。人形浄瑠璃は3人で操作する高度な技術を要する人形劇であり、体験を通じて協力の難しさや、操作一つで人形に人格や表情を与える技術の素晴らしさを学ぶことができる。また、進学先の地元中学校には「人形浄瑠璃部」があり、進学後の部活動を通じて伝統文化の継承が行われており、小中連携の一環としても大きな意義をもっている。

成 果　人形浄瑠璃の操作体験を通じて、郷土の伝統文化を学び、郷土への誇りや伝統を継承しようとする気持ちを育むことができる。

実践内容❸

「郷土の「鬼祭」に登場する張り子の面作り（5年生）」

地域講師から伝統を学ぶ面作り

ねらい：郷土に伝わる「鬼祭」の面作りをとおして、伝統技能の巧みさや面作りの楽しさを学ぶ。

5年生の図工の時間に、地域の奇祭「鬼祭」に登場する「鬼」や「天狗」のお面を作成している。地域の張り子保存会の方を講師にお招きし、この地域に古くから伝わる張り子作りの技法で面作りを行った。まず、粘土で型を作り、その上から和紙を張り合わせ、「ゴフンノリ」と呼ばれる貝殻の粉を含んだ塗料を塗布し、乾燥させ、絵付けをする。図工の学習としても粘土での型作りの造形、和紙の貼り付け、その後の絵具での絵付けなど、多くの要素を含んだ優れた教材となっている。児童は、造形から絵付けまで、地元の講師さんに教えてもらいながら、楽しく作成することができた。完成作品は、毎年、豊橋まつりのときに開催される「豊橋市子ども造形パラダイス」に展示している。

成 果　張り子の面作りをとおして、図工の学習としても多くのすぐれた伝統技法を学ぶことができる。また、地域の奇祭に関する作品作りをとおして伝統的な祭りに誇りをもち、地域を愛する気持ちが醸成できる。

おわりに

カリキュラムに地域の歴史、伝統文化など地域の内容を積極的に位置づけたことで、自分たちの地域を知り、地域を愛するきっかけになった。今後も、地元の伝統文化に誇りをもつとともに、イマージョン教育では、海外の学校との交流を進め、地域の文化や歴史を発信できるようになってもらいたい。また、本校では、コミュニティ・スクールをESDの柱に位置づけている。そうすることで、多様な地域人材の協力を得て、児童のコミュニケーション力や精神支援にもなっている。「地域の方にお世話になった子は、将来地域に戻ってくる」といわれている。本校の子供たちが持続可能な地域の担い手として活躍する日がくることを願っている。

豊橋市立西郷小学校

住　所：〒441-1103 豊橋市石巻萩平町字城脇164-2
連絡先：TEL 0532-88-0271　FAX 0532-87-1013
H　P：https://www.toyohashi-c.ed.jp/saigou-e/

創　立：1872年
学級数：8
児童数：100人

生物多様性　海洋　減災・防災　気候変動　エネルギー　環境　文化多様性　世界遺産・無形文化遺産・地域の文化財等
国際理解　**平和**　人権　ジェンダー平等　福祉　**持続可能な生産と消費**　健康　**食育**　貧困
エコパーク　ジオパーク　グローバル・シチズンシップ教育（GCED）　その他関連分野

青い目の人形と次郎柿のふるさと　西郷のまち

はじめに

本校は、愛知県豊橋市の最北部に位置する小規模校である。地域の基幹産業は農業であり、主に果樹栽培が行われている。本校には、アメリカから贈られた「青い目の人形」が残っている。これは、1926年に日米友好の証としてアメリカから贈られた約12,000体の人形の一つである。本校では、このような地理的・歴史的環境を生かし、「ふるさと西郷に自信と誇りをもつ子」の育成を目指して活動を続けている。

実践内容❶
「仲よくしよう　青い目の友達　～青い目の人形～」

ねらい：青い目の人形にまつわる歴史をとおして、国際交流への関心や平和を願う気持ちを高める。

本校に残っている「青い目の人形」には、「コネタ」という名前がつけられている。この名前は人形の出身地とされるアメリカ合衆国オハイオ州にあるワパコネタという町の名前に由来している。

現在、本校では全校集会として「コネタ集会」を年に1回開催し、コネタにまつわる歴史を紹介しながら戦争や交流について語り継いでいる。集会にはコネタを囲んで全校児童が参加する。さらに、3年に一度、青い目の人形に関わる演劇を鑑賞し、理解と関心を深めている。校内には「コネタストリート」というコーナーを設置し、コネタ集会の様子や過去の出来事について学べる環境をつくっている。コネタに関わる日米交流の学習については、主に5年生が担当し、集会の運営やストリートの掲示物の作成を行っている。この活動をとおして、子供たちは当時の国際交流や戦争の事実について知識を深め、コネタを大切に思う心を育てている。

また、本校とワパコネタ小学校との交流として、児童作品交換を行ってきた。ワパコネタ小学校からは絵画作品が送られ、今も大切に保管されている。本校からも、絵画作品や折り紙作品を送り、友好関係を築いてきた。

コネタ集会で5年生が発表

成　果

青い目の人形がたどってきた歴史をとおして、子供たちは日米友好について「仲よくしていれば人形がなくなることもなかったのに」「戦争があっても、コネタが生き残ったのでよかった」というような感想が聞かれた。コネタ集会を継続して行うことで子供たちの平和への意識を醸成できている。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
1 貧困をなくそう　2 飢餓をゼロに　3 すべての人に健康と福祉を　4 質の高い教育をみんなに　5 ジェンダー平等を実現しよう　6 安全な水とトイレを世界中に　7 エネルギーをみんなに そしてクリーンに

実践内容❷

「西郷のおいしい宝物 ～西郷の柿作り～」

ねらい：地域の柿作りの伝統について考え、地域のよさに関心をもって行動できる。

西郷校区は農作物の栽培が盛んであり、特に果樹栽培が行われている。中でも、次郎柿の生産は多くの農家で行われており、日本有数の生産地となっている。子供たちの家庭でも、柿栽培を中心とした農家が多い。本校では３年生の総合的な学習の時間の題材として、柿の栽培体験を取り入れている。学校近くの畑に12本の柿の木を借り、主に３年生が柿畑の世話を行っている。このような環境の中、地域の人と関わり合いながら地域のよさを具体的に捉え、生まれ育った地域への愛着をさらに深めていこうと考え、実践を続けている。

柿の栽培について詳しく知るために、校区内で柿を栽培している柿農家の方に来ていただき、栽培の様子について学習する機会を設けた。一年をとおして多くの作業があり、おいしい柿を作るための工夫や苦労も合わせて知ることができた。この学習の後には、大きく育てる柿の実を選定して他の実を切り落とす作業（摘果）を子供たちが実際に行った。

夏場には、柿の実を大きく育てるための作業を見学に出かけた。草取りや消毒、追肥など多くの作業があることに子供たちは大変驚いていた。柿農家の方の「おいしい柿を食べてもらいたい」という思いや柿作りのやりがいや喜びを、子供たちは受け止めていた。

全校児童で柿の収穫作業

柿農家の方の出前授業

10月末から11月初めにかけて、柿が収穫できるようになる。地域でも柿の収穫が始まり、家で作業を手伝う子供たちも多い。収穫作業は、学校行事として全校児童が参加することとしている。低学年の作業には高学年の子供たちが手伝うなど全校児童の交流も行う。12本の柿の木からはおよそ2,000個の柿が収穫できる。収穫した柿は、子供たちが家庭に持ち帰るほか、段ボールに箱詰めをしてお世話になった方たちへ贈るための出荷作業を行ったり、地域で柿の販売を行ったりもしている。

柿の栽培・収穫・出荷・販売という一連の活動を行うことで、地域の産業の仕組みを理解すると同時に、柿栽培に生きる人たちの思いを理解し、「西郷の柿を大切にしたい」という感想が見られた。活動の様子については学習発表会で発表し、活動のまとめと同時に地域への発信も合わせて行っている。

成 果

農業の後継者不足が問題となっている現在、地域の柿作りを学ぶことによって、子供たちは住んでいる地域の現状について学びを深めてきた。農家として柿作りをしている家庭も多く、「家の柿作りを手伝いたい」「農家の後継ぎになろうと思う」という感想が多くあった。

おわりに

「青い目の人形」「柿作り」のどちらも、本校ならではの活動である。「青い目の人形」については、約40年前に学校で人形が発見されて以来、お互いの現地交流を行ったこともあった。その後、作品交換を行ってきたが、最近は交流が途絶えている。国際的な交流がなくなっても、学校での取組はずっと続けていきたい。また、「柿作り」は、地元JAの支援も受け、活動の様子を新聞やテレビで紹介されるなど広く知られた活動となっている。どちらも取組を継続して進めていきたい。

豊橋市立玉川小学校

住　所：〒441-1115 豊橋市石巻本町字野添10番地
連絡先：TEL 0532-88-0007　FAX 0532-87-1014
H　P：https://www.toyohashi-c.ed.jp/tamagawa-e/

創　立：1873年
学級数：10
児童数：206人

生物多様性 海洋 減災・防災 気候変動 エネルギー 環境 文化多様性 **世界遺産・無形文化遺産・地域の文化財等**
国際理解 平和 人権 ジェンダー平等 福祉 **持続可能な生産と消費** 健康 食育 貧困
エコパーク ジオパーク グローバル・シチズンシップ教育（GCED） その他関連分野

地域から学び、ふるさと玉川への愛情を深める子

はじめに

本校は、豊橋市の北部に位置し、石巻地区特産の柿畑が広がる豊かな自然と史跡に富んだ地域にある。子供たちは、明るく純朴で、異学年の子とも仲がよい。そのような環境の中で、地域の「ひと・もの・こと」に繰り返し関わることで、課題を自分事として捉え、意欲的に学習に取り組む力を、そして、探究していく中で、自分ができることを考え行動しようとする力を育てることを目標として実践を行っている。

実践内容❶
「『みんなで守ろう！ぼくらの神田川』大作戦」

ねらい：神田川の環境を守り、地域に愛される川にするために自分たちにできることを考える。

玉川小学区を流れている神田川。４年生は、この川に探検に出かけた。川の様子に興味津々の子供たちは、橋の欄干に卒業生が描いた絵が彫られていることや、川岸の看板を見て「一級河川」であることを知り、神田川への関心が高まった。

子供たちは、神田川の水質調査や観察を行った。試薬を使った水質検査や水生生物調査、過去の調査結果との比較などをとおして、川の水質を客観的に捉えることができた。また、市の河川課の方との交流で学習を進め、川と水質汚染、生物多様性、災害との関係についての知識を高めた。

嵩山小とのTeamsでの交流の様子

神田川は上流にいくと嵩山川と名前を変える。「神田川と上流の嵩山川では、水質や川の生き物は違うのか」と、疑問をもった子供たちは、上流に位置する嵩山小の４年生と、Teamsで交流学習を行った。子供たちは、嵩山小で毎年放流しているホタルについて、その生態に関わる活動について教えてもらった。子供たちは、神田川にもいつかホタルが飛び交うことを願った。

子供たちは、この学びをとおして、地域の豊かな自然に親しみ、いつまでも守り続けていこうとする思いをもった。そして、そのためにできることを考えて、学習発表会で地域の方へ伝えた。

成　果

神田川について調べたり、近隣の学校との交流学習をしたりする中で、これからも地域の川の環境を守っていきたいという思いを高め、川のためにできることを考えて実践することができた。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

実践内容❷

「次郎柿でつながれ！農業の輪」

ねらい：地域の方々とのきずなを深め、地域の地場産業を大切にし、地域を愛する心を育む。

次郎柿は、地域を代表する農業生産物で、全国一位の出荷額を誇っている。子供たちの中には、同居している祖父母や家業が次郎柿の生産者の家の者も少なくない。しかし、次郎柿の市場単価は高いとは言えない。日々かかる消毒薬や殺虫剤の費用、作業に必要な機械類の維持費用も負担となってくる。農家の高齢化、担い手不足をはじめとする農業を取り巻く環境がよい状況ではないとということは、子供たちはうすうす気づいていた。

そのような状況の中で、本校の５年生は、20年以上にわたり校地に隣接している学校農園で次郎柿の栽培を行っている。地域を代表する次郎柿が、これからどうなっていくのかは、子供たちにとっても身近な問題として考えていくことが必要である。実際に次郎柿の栽培をとおして、地域の一員としてどんなことができるのかを考えていくためのきっかけにしたいと考えた。

子供たちは、柿の栽培にかかる手間、作業の内容、それを支えてくださっている地域の方の働き、協力してくださるJA職員や近隣柿農家の人を知ることで、「働く」人の姿を具体的にイメージしていくことができた。また、現状の近隣農家が困難に感じていることを知り、自分たちができることとして「農業のよさの紹介」「次郎柿を使った料理の研究」「農家の仕事の助けになる活動」などを考えた。

地域の方の教えてもらってジャム作り

次郎柿の栽培には「摘蕾」「摘果」「収穫」「剪定」などの作業がある。特に、次郎柿の実の品質を保つ「摘果」は大切な作業である。子供たちは、JA青年部の方々にアドバイスをいただきながら取り組んだ。その後、子供たちは、次郎柿について自分が体験した作業や教えていただいたこと、図書やインターネットを活用して調べたことを新聞にまとめた。新聞作りには、タブレット端末にあるアプリを活用し、調べたことに誰でもコメントできるようにして交流した。新聞作りで得た次郎柿についての学びや情報を共有することで、ふるさと玉川の次郎柿への思いを高めることができた。

JAの方の摘果指導の様子

実りの11月を迎え、子供たちは、オレンジ色に輝いた次郎柿をJA青年部の方々と協力して収穫した。収穫した次郎柿は、販売がスムーズにできるように販売計画を立て、全校児童や校区の方々に販売した。また、販売に適さない次郎柿は、どうするかを話し合い、「次郎柿ジャム」にして、お世話になった方々に配ることにした。収穫した次郎柿を無駄にしないことも大切だということに気づけた。

成 果

地域の農業のよさや現状、課題、そこに携わる人々の思いを知ることができた。また、携わる人の思いに気づき、自分たちにできることを考え、実践することができた。

おわりに

地域の方々に支えられながらの活動により、子供たちは地域の中で見守られて成長している。身近な教材は、子供たちにとって課題意識をもちやすく、すすんで活動に参加する態度が見られたり、地域の方との温かな人間関係が育まれたりした。情報社会である現代にあって、これからの社会を築いていく子供たちにとっては、地域の「ひと・こと・もの」との関わりはとても大切なきずなであると考える。地域を愛し、地域とともに生き、自分たちの暮らす玉川を「大好き」と言える子供たちを育てるために、今後も活動を継続していきたい。

田原市立衣笠小学校

住　所：〒441-3421 田原市田原町東栄巌70番地
連絡先：TEL 0531-23-1818　FAX 0531-23-3849
H　P：https://www.tahara-c.ed.jp/kinugasasyou-e/

創　立：1985年
学級数：14
児童数：337人

生物多様性　海洋　**減災・防災**　気候変動　エネルギー　環境　文化多様性　**世界遺産・無形文化遺産・地域の文化財等**
国際理解　平和　人権　ジェンダー平等　福祉　持続可能な生産と消費　健康　**食育**　貧困
エコパーク　ジオパーク　グローバル・シチズンシップ教育（GCED）　その他関連分野

地域に愛着や誇りをもてる子の育成

はじめに

本校は、田原市の中心部に位置し、周囲には消防署、警察署、市役所など官公庁がある。田畑や、山なども校区内にあり、住宅地と自然が調和した校区である。また、開校時から地域に愛され、見守られてきた学校である。

児童数増で新設された学校であるが、現在は少子化が進んでおり、児童数も年々減少傾向にある。総合的な学習や普段の授業において、地域のよさや魅力を取り上げ、自分たちの住む地域に愛着や誇りをもてる子を育成したいと考える。

実践内容❶
「守るぞ命、守るぞ衣笠！」

ねらい：防災学習をとおして、地震が起きた時に、自分たちには何ができるかを考えることができる。

能登半島地震をはじめ、日本中のあらゆる地域で地震が頻発している。本校のある田原市も南海トラフ地震が心配されている。過去に日本で起きた地震、南海トラフ地震の被害想定の映像を視聴した。映像から、子供たちは地震の恐ろしさを感じ、地震に対する危機感をもった。そこで、大地震発生時に自分の命を守れるように、田原市防災学習プログラムを活用して防災スクールキャンプを行った。

市役所の防災対策課の方から「避難所スペースづくり」について話を聞いた。避難所では老若男女、様々な人が共同で生活するため、プライバシーに配慮した生活スペースづくりが大切であると分かった。プライバシーを保つためにパーテーションで区切って、自分たちの寝るスペースを作ることができた。

さらに、赤十字奉仕団の方の指導の下「パッククッキング体験」を行った。災害時でも安心・安全で温かい食事を作る調理法がパッククッキングである。一人分ずつの材料をお湯で茹でるだけで作れるので水の節約や感染予防にもつながる。今回は、カレーライス作りを行った。「作り方が簡単で災害時に役立つ」「これなら子供からお年寄りまでおいしく楽しく食べられる」と感想があった。

赤十字奉仕団の方と一緒にパッククッキングをする様子

成　果

防災スクールキャンプをとおして、避難所生活の大変さを身をもって感じることができた。自分の身は自分で守るという防災意識が高まり、自分にできることや地域の一員として動こうという気持ちをもつことができた。また、共同生活では、自分だけでなく周りに気を配ることも大切だと感じることができた。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

実践内容❷

「郷土の偉人「江崎巡査」の思いを伝えよう」

ねらい：劇作りをとおし、郷土の偉人、江崎巡査の思いや生き方を理解し、これからの生活に生かす。

学習発表会で上演した劇「江崎巡査物語」の様子

本校は、毎年６年生が学習発表会で劇『江崎巡査物語』を上演している。江崎邦助巡査は、明治時代、コレラの防疫に従事し、防疫を不安がり抵抗する住民の説得を続け、感染拡大を防ぎ殉職した郷土の偉人である。児童は、江崎巡査の紙芝居を見たり、田原署の警察官から話を聞いたりして、江崎巡査が自分の命を犠牲にしてまで田原のためにコレラと戦った勇気や警察官としての使命感から命の大切さを考えていった。劇作りでは、これまでの台本を基に自分たちで話し合い、台詞を工夫したり、動作をつけたりすることで、自分たちの劇を作り上げていった。当日は、自分たちの思いをのせて、江崎巡査の生き方や思いを全校児童や地域の方の前で演じた。

成 果　児童は、自分の命と引き換えに大勢の命を救った江崎巡査に思いを馳せ、自分たちも演じられたことに誇りをもつことができた。また、江崎巡査が命をかけて守ってくれたふるさとをこれからも大切にしていきたいと考えることができた。

実践内容❸

「地域の伝統「田原凧」を受け継ごう」

ねらい：「田原凧」について調べたり体験したりすることをとおして、地域の伝統を大切にする心を育てる。

学習発表会での凧の色付け体験の様子

４年生は、「田原凧」の歴史を調べ、実際に作ったり揚げたりしている。地域の方から話を聞いたり、実物の凧を見学したりすることで、「田原凧」が江戸時代から親しまれてきた伝統であることを学んだ。児童は、「実際に作って揚げてみたい」という思いをもち、地域の方に作り方を教えてもらう場を設けた。凧揚げでは、自分で作った凧に愛着をもって楽しみ、「田原凧」の楽しさや地域の方への感謝を口にしていた。そんな児童たちに「学習発表会では、地域の人に凧の色付け体験をしてもらうよ」と伝えた。自分たちで必要な準備を話し合ったり、宣伝用の看板を作ったりしていった。当日も懸命にお客さんを呼び込み、多くの人に体験してもらうことができた。

成 果　地域の人と関わりながら調べたり体験したりすることで、地域の伝統に愛着をもち、受け継いでいこうとする気持ちが高まった。また、できることを考えて実践することで、自分たちも伝統の継承に大切な役割を担っていることを実感することができた。

おわりに

地域の方々に支えられた活動を行うことで、子供たちの中でも地域に対する愛着や誇りを持つことができるようになってきた。また、自分たちで調べたり実際に体験を行ったりすることで、より地域を身近に感じるようになった。今後は、自分たちだけでなく他学年や地域などに、衣笠校区のよさや魅力について発信をしていけたらと思う。しかし、まだ子供たちの学びでの取組の中で受動的な部分も多く見られたため、主体的に取り組めるような地域教材の開発や自ら課題を見つけ、その課題に向けて解決できるような力も養っていきたい。

名古屋大学教育学部附属中・高等学校

住　所：〒464-8601 名古屋市千種区不老町
連絡先：TEL 052-789-2680　FAX 052-789-2696
H　P：https://highschl.educa.nagoya-u.ac.jp/

創　立：1947年
学級数：15（中学6 高校9）
生徒数：600人（中学240人 高校360人）

生物多様性　海洋　減災・防災　気候変動　エネルギー　**環境**　文化多様性　世界遺産・無形文化遺産・地域の文化財等
国際理解　**平和**　**人権**　**ジェンダー平等**　福祉　持続可能な生産と消費　**健康**　食育　**貧困**
エコパーク　ジオパーク　グローバル・シチズンシップ教育（GCED）　その他関連分野

セクショナリズムとコーポレーショニズム

はじめに

世界全体がセクショナリズムに向かっている風潮の今だからこそ、次世代を担う子供たちにはコーポレーショニズムについての理解を深めてほしい。身近なところからスタートし、次第にその範囲を世界規模に広げていってほしい。ボーダーレスが一般化した現在、人や国は「個」では、生きていけない。「タイパ」や「コスパ」が重宝がられるが、じっくりと時間をかけて、答えのない課題をあれこれ考えることが今年の活動テーマである。

実践内容❶
「モンゴルの大草原から地球環境を考える!」

ねらい：大草原と大都会、二つの顔をもつモンゴルで、地球があるべき姿をじっくりと考える。

2024年7月23日にセントレアから羽田を経由して生徒と教員がモンゴルを訪問した。9日間の滞在のうち、前半は草原で遊牧民とゲルスティ。後半は首都ウランバートルでホームスティを実施。訪問に先立ち、モンゴル人高校生10名を本校で1週間受け入れた。事前学習として「モンゴル語講座」も5日間開催した。見渡す限り何もないモンゴルの大草原で真っ暗な夜空を見上げ、遊牧民と衣食住をともにした。その後移動した大都会ウランバートルでは、超近代的な生活に舞い戻り、そのギャップについて考えた。少子化・高齢化、地球環境の急減期な変化、グローバル情勢の混迷等、今の子供たちは、非連続的な課題に立ち向かうことが必然視される時代を今後生き抜いていかねばならない。経済発展か地球環境かの二項対立ではない「何か」を探し、考案し、実践しなければならない。私たち大人は、「負の遺産」を子供たちに残すわけにはいかない。子供たちとともに考え、ともに同じ目線に立って彼らの将来をともに創造していく責務がある。モンゴルの草原で感じ、話し合ったことが今後の生徒と教員、双方に大きな影響を与えることを期待している。

モンゴルの大草原にて

成　果

大気調査と水質調査をウランバートルと草原で実施し比較した。その結果をモンゴルのJICAと日本大使館で報告した。モンゴルの現状等についてJICAや大使館職員からアドバイスを受けたことは成果である。課題意識をもって非日常の体験をする効果は、生徒のジャーナルや報告から見てとることができた。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

実践内容❷

「高校生国際会議 －SDGsについて－」

議論の様子

ねらい：世界の高校生とSDGsについて議論し、コーポレーショニズムの重要性について実践的に学ぶ。

SDGsというと文系生徒が議論するテーマだと考えられがちであるが、実際は理系分野に大きく関わることが多い。つまり、SDGsは、文系や理系の壁と取り払って考えなければならないテーマである。今回の高校生国際会議は文理融合を「ねらい」として２日間実施した。参加者は、日本の高校生56名、海外の高校生30名、名古屋大学留学生がファシリテータとして29名で120名弱の規模で実施した。海外からの高校生は22か国から参加した。SDGsのテーマごとに小グループに別れ、１日目は理系生徒と文系生徒が別々のグループで議論。２日目は、同じゴールについて議論をしていた理系生徒と文系生徒が一緒に議論を行い、理系的アプローチと文系的アプローチを融合させた解決作を考案し発表した。

成 果　基調講演と成果発表内容をピクチャーブックにまとめて参加者に配布した。このことで議論の内容を振り返ることができ次につなげる手助けとなった。異なる国々の高校生がざっくばらんに議論することで、コーポレーショニズムの重要性を学ぶことができた。

実践内容❸

「木曽馬プロジェクト －生物多様性について考える－」

開田高原フィールドワーク

ねらい：「種の保存」についての研究実践をとおして、人類という種について考える。

授業後の活動である「生徒研究員制度」のひとつに木曽馬プロジェクトがある。先進国では少子高齢化が進んでいるものの地球規模では人類総数は増加の一途をたどっている。2080年代半ばには103億人に達すると言われている。この現実と並行してWWF（世界自然保護基金）によると、現代は生物多様性の深刻な危機に現在陥っており、絶滅危機種が４万種を超えているという。中部地区においても、もともとは日本在来馬のひとつであった「木曽馬」が年々その数を減らしている。木曽馬プロジェクトでは、木曽馬についての研究をとおして、種の保存について考えるとともに、人類という種のこれからについても考えることを目標としている。今年度は、手始めに木曽馬についての研究をスタートさせた。

成 果　本校に木曽馬２頭を招聘し、多くの生徒が木曽馬と触れあった。また同時に木曽馬についての講演会や展示を行うことで木曽馬についての興味をもつ生徒が増え、開田高原のフィールドワークには多くの生徒が参加し次のステップにつなげることができた。

おわりに

「セクショナリズムとコーポレーショニズム」をテーマとして今年度は様々な活動を展開した。学校自体が「自校中心主義」に陥らないように多くの高等学校に声をかけさせていただき、多くの生徒に参加していただいた。異なった学校風土をもつ生徒たちは、相手の出方を探ることからであったが、徐々にその特色を前面に出しながら意見を交換していた。小さな集団から始まる議論はやがて大きくなり世界へと波及していくことを期待している。個別に持ち合わせている課題は多いが、全体として地球を考えていかねばならない時代である。

愛知県立愛知商業高等学校

住　所：〒461-0025 名古屋市東区徳川一丁目12番1号
連絡先：TEL 052-935-3480　FAX 052-935-3470
H　P：https://aichi-ch.aichi-c.ed.jp/
創　立：1919年
学級数：21
生徒数：817人

生物多様性　海洋　減災・防災　気候変動　エネルギー　**環境**　文化多様性　世界遺産・無形文化遺産・地域の文化財等
国際理解　平和　人権　ジェンダー平等　福祉　**持続可能な生産と消費**　健康　食育　貧困
エコパーク　ジオパーク　グローバル・シチズンシップ教育（GCED）　その他関連分野

ユネスコクラブが歩むSDGsへの道

はじめに

本校では、名古屋近代化の歴史的遺産が数多く残るエリア「文化のみち」の地域活性化を目標として2011年より「なごや文化のみちミツバチプロジェクト」がスタートした。2016年にユネスコスクールとして登録されたことをきっかけに「ユネスコクラブ」として改名した部活動では、都市型養蜂と商品開発を核とした活動をとおして、環境を守る活動を行っている。

実践内容❶
「高校生による養蜂活動と地域活性化」

ねらい：都市型養蜂と商品開発をとおして、環境について考え直すとともに、持続可能な街づくりを目指した活動を行う。

2011年より「なごや文化のみちミツバチプロジェクト」が立ち上がった。校舎の屋上で養蜂活動を実施し、養蜂を通じた生態系の向上や特産品の開発により地域活性化を目指す取組である。本校周辺には日本庭園「徳川園」があり、それを蜜源としているハチミツに「徳川はちみつ」と名付け、2013年に商標登録を行った。

屋上での養蜂活動の様子

ミツバチは環境指標生物とされており、約７割の作物の受粉の媒体となっていると言われている。また、農薬汚染が少なく多様な花や緑に囲まれた環境でしか生育できない生物でもある。名古屋市東区が主催する「スモールアクションプロジェクト」に参加し、学校内だけではなく学校周辺の花壇の整備を行い、ミツバチの蜜源確保とともに、花で「人」「地域」「ミツバチ」の全てが幸せになれるよう持続可能な街づくりに向けて活動を続けている。また採取したハチミツは、アイスクリームやはちみつスティックとして商品化している。これらの商品は地域のイベントで販売され、地域活性化に貢献している。

成　果

ミツバチをとおして環境や持続可能な街づくりを考えた活動を続けている。2023年に開発したアイスクリームはフェアトレードの「黒糖」を使うなどSDGsの目標を達成できるように考えるようになっていった。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
1 貧困をなくそう　2 飢餓をゼロに　3 すべての人に健康と福祉を　4 質の高い教育をみんなに　5 ジェンダー平等を実現しよう　6 安全な水とトイレを世界中に　7 エネルギーをみんなに そしてクリーンに

実践内容❷

「アップサイクルがつなぐ地元産業を救う道」

ねらい：地元産業の課題を知り、解決を目指すことで、持続可能な生産と消費を目指す。

完成したアップサイクルの推し活バッグ

愛知県の基幹産業である自動車産業の課題は増加する廃棄物の量であった。その中で、シートベルトは1日に約300kgの廃棄があることが分かった。この問題を解決する取組としてシートベルトを活用したアップサイクルのバックがいくつかあり、県内では株式会社東海理化のThinkscrapを見つけた。アップサイクルとは、本来廃棄される予定の製品に新たな価値をつけて再生することである。近年、SDGsに関する高まりと、SDGsに関する取組が投資の対象となっている中で、このバッグを改良し新たな製品を生み出す。SDGsの目標である12「つくる責任つかう責任」に配慮した活動ができると考えた。

新たなバッグを提案する際には、授業で学ぶマーケティングの知識を活用し、現状のバッグの分析やターゲットを決めていった。既存の製品には「男性用」「ビジネス用」といった特徴がみられたため、高校生という立場を生かし、若年層をターゲットにした「推し活バッグ」がいいのではないかということで提案をし、快諾をいただいた。完成された製品を販売する際にもAIDAモデルなどの知識を活用したり、SDGs関係のイベントで販売したりするなど創意工夫を行い、多くの人にアップサイクルについて知ってもらうこともできた。また、このバッグはシートベルトだけではなく他の端材も使用したため、多くの端材を削減することにつながった。

推し活バッグの販売実習

このような活動をしていくことで、アップサイクルの関心が高まっていった。イベントとして出店したワークショップでは、役目を終えた未利用の毛糸と木の端材を使ったストリングアート作りや、木の端材と紙粘土を利用したオリジナル写真立て作りなどの取組を行い、学校内だけでなく、地域の方々に向けたアップサイクルの認知度を高める活動もしている。

現在も、新たな推し活バッグの販売や地域企業とコラボ商品を考えるなどの活動を続けている。今後も様々な場面でSDGsを意識し、地元産業を救うため私たちでできることを推進していきたい。

成 果

地元産業が抱えている課題に対して授業で学ぶ商業の知識とSDGsを結び付け、新たなターゲットを発掘し販売につなげていくことができた。日々の学びが世の中につながっていることを再認識することができ、多くの人とのつながりについても実感することができた。

おわりに

ユネスコクラブでは、都市型養蜂や商品開発をとおして地域活性化とSDGsの目標達成のための取組をしている。参加するイベントでは様々な人や商品に出会い、私たちの活動を伝えていくとともに環境に対する新たな気づきも生まれている。これからも「文化のみち」の地域活性化に取り組みながら、ユネスコスクールとしてSDGsの考えを達成できるよう持続可能な発展を目指し精力的に活動を続けていく。

愛知県立豊田東高等学校

住　所：〒471-0811 豊田市御立町11丁目1番地
連絡先：TEL 0565-80-1177　FAX 0565-80-5066
H　P：https://toyotahigashi-h.aichi-c.ed.jp/

創　立：1924年
学級数：18
生徒数：704人

生物多様性　海洋　減災・防災　気候変動　エネルギー　環境　文化多様性　世界遺産・無形文化遺産・地域の文化財等
国際理解　平和　人権　ジェンダー平等　**福祉**　持続可能な生産と消費　健康　**食育**　貧困
エコパーク　ジオパーク　グローバル・シチズンシップ教育（GCED）　その他関連分野

世界や地域との共生から学びを得る

はじめに

本校は、環境教育、国際理解教育、地域連携教育を三つの柱として、ESD（持続可能な開発のための教育）に取り組んでいる。具体例としては探究活動と連動した台湾修学旅行や、姉妹校派遣を軸とした国際理解教育、地域でのボランティアや企業連携などの活動を実践している。また、自他の敬愛と協力により、多様な生き方や価値観を尊重するとともに、自らの在り方や生き方を追求して夢の実現に向けて主体的に行動する生徒を育成している。

実践内容❶
「オーストラリア姉妹校との異文化交流」

ねらい：オーストラリア姉妹校との交流をとおして、異文化を理解する態度を養う。

2024年7月21日(日)から29日(月)の9日間、生徒15名に引率教員3名の総勢18名が本校の姉妹校であるオーストラリアのパスコベール女子高を訪問した。

体育の授業に参加しオーストラリアで盛んなクリケットをしたり、クッキングの授業ではオーストラリアの伝統的なお菓子であるアンザッククッキーを作ったりした。また、日本語の授業で、本校生徒が「日本の年中行事」「本校の学校行事」「若者言葉」を紹介するとともに、ソーラン節を一緒に踊る、書道を教える、短冊に願い事を書くなどし、現地生徒と交流を深めた。今回はホームステイ中に「日豪での違いを発見し、ホストシスター・ファミリーと話し合う」という課題にも取り組んだ。祝賀ディナーでは、日本の歌や、地元豊田市の「おいでんダンス」を披露し感謝の気持ちを伝え、別れを惜しんだ。

現地生徒と書道を楽しむ

帰国後の活動として、帰国報告会を行った。この経験で得たことを他の生徒と共有することを目的に、体験と学びを伝える場となった。派遣生徒たちは、9日間の経験をとおして、英語力だけでなく、異文化理解力、非言語コミュニケーション力、自己管理力、そして視野の広がりといった自らの成長について語った。

成　果

オーストラリア姉妹校との交流をとおして、派遣生徒たちは実際に異文化に触れ、自らの英語力、コミュニケーション力を試す良い機会を得ることができた。また、帰国後にこの体験を他の生徒たちと共有することで、学校全体が多様性や共生に対する学びを深めることができた。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

実践内容❷
「地域連携活動」

ねらい：ユネスコスクールの一員として、現代社会の問題を主体的に捉え、解決に取り組む姿勢を育む。

「高校生の作るお弁当」試作の様子

地域の商店街から、フラッグ（のぼり）と店舗バナー（宣伝用の旗）作成の依頼を受け、ビジネスプランの３年生が学んできたことを生かしてフラッグの制作に取り組んだ。また、バナーは、美術プランの３年生が授業の中で作成した。生徒は各店舗に出かけ、商店主と打ち合わせを行った。準備していった図案が却下されることもあり、完成までに何度も確認するなどできるだけ商店主の意向を取り入れながら制作したバナーは、裏表異なる図案でアクリル絵の具を使って美しく仕上げることができた。

地域活性化のため地域の企業と連携し、消費者目線に立った商品開発の知識・技能を学ぶことを目的として、調理・栄養プランの３年生が「高校生の作るお弁当」企画に、２年生が「高校生の作る恵方巻」企画に取り組んだ。いずれも制作・試食を繰り返した末、地元のスーパーマーケットで販売され、好評を得ることができた。

豊田商工会議所青年部が立ち上げた非営利組織の様々な活動にも参加した。今年度は、延べ200名以上もの生徒がボランティアとして参加した。

４月の「それいけ！とよた魅力発見隊」は、小学生が市街地のチェックポイントを回って豊田市の魅力を再発見しようというイベントで、生徒が「先輩隊員」として小学生のグループに同行した。生徒たちは小学生たちの行動力や想像力に驚かされながらも、「楽しかった」の言葉にやりがいを感じることができた。

豊田市の夏の風物詩「とよたおいでん祭り」のプレイベントである「豊スタおいでん夏祭り」では、『こども縁日』のブースを中心に手作りの輪投げや射的・ダーツ・ナンバータッチゲーム、また回遊企画やふわふわ遊具のスタッフとして活動した。

10月のとよた産業フェスタでは、生徒たちは来場者への対応だけでなく、スタッフやブースの手伝いをする子供たちとも盛んにコミュニケーションをとり、様々な経験をすることができた。多くの人の支えがあってこそこのようなイベントが安全に開催されているということに気づくきっかけとなった。

12月の「とよた元気まつり」は、「このような状況だからこそ、地域が力を合わせて豊田を元気にしたい」という地域の思いから開催が始まり、今年で４年目になる。今年度は「豊田市最大級の子どもまつり」のテーマのもと、「東高わくわくひろば」を生徒が企画・運営した。まちづくりの活動に取り組む市民活動団体や企業の若手社員などの社会人とともに活動することで、多くのことを学ぶ機会となった。

産業フェスタでの様子

成 果

地域での活動を経験した生徒には、このような活動がなぜ必要とされているのか、自分たちはこれから地域社会とどのように関わっていくべきなのか、どのような貢献ができるのかをより一層考える良い機会となった。そしてこのような経験が、自分の進路をより具体的に考える一助となっている。

おわりに

本校のESD（持続可能な開発のための教育）の活動は、生徒が日頃の学びを生かし、自分の進路を考える場となっている。ユネスコスクールとして、「SDGsをとおして持続可能な社会の担い手を育む教育」を具体的にどのように進めていくべきかを、本校の全職員で考えて取り組んでいきたい。また、今年度も新たに築くことができた多くのつながりに感謝し、来年度も新しいつながりを築いていきたい。

愛知県立刈谷北高等学校

住　所：〒448-0846 刈谷市寺横町1丁目67番地
連絡先：TEL 0566-21-5107　FAX 0566-25-9164
H　P：https://kariyakita-h.aichi-c.ed.jp/cms/

創　立：1921年
学級数：27
生徒数：1,065人

生物多様性　**海洋**　減災・防災　**気候変動**　**エネルギー**　**環境**　**文化多様性**　**世界遺産・無形文化遺産・地域の文化財等**
国際理解　**平和**　人権　ジェンダー平等　福祉　持続可能な生産と消費　健康　**食育**　貧困
エコパーク　ジオパーク　グローバル・シチズンシップ教育（GCED）　その他関連分野

生徒主体で取り組む国際交流

はじめに

2023年度から生徒の往来を伴う交流も再開し、実際の交流をとおして関わりを深めることができている。その交流では、生徒が主体となって交流の活動内容を企画・運営するように計画をして実施している（参照：実践内容①、実践内容②）。自分たちの運営する交流をとおして、より国際交流について考える機会となっている。また、国際理解をさらに広げる機会として、全校生徒を対象にした講演会を実施している（参照：実践内容③）。

実践内容❶
「オーストラリア姉妹校交流（マクレラン高校）」

ねらい：姉妹校交流を通じ、異文化理解を深め、国際的な友情とコミュニケーション能力を育む。

本校とオーストラリアのマクレラン高校との姉妹校交流が、今年度９月16日から22日の間に行われた。マクレラン高校からは20名の生徒と３名の教員が来校し、両校の生徒が直接交流する貴重な機会となった。一部の本校生徒はホームステイを受け入れ、オーストラリアの文化や日常生活を体験した。また、他の生徒たちはバディとしてマクレラン高校の生徒のお世話をし、言語を使ってコミュニケーションを取りながら交流を深めた。交流期間中、生徒たちは実際の授業に参加し、部活動の見学も行った。授業を通じて、両国の教育の違いや学び方を実感し、オーストラリアの生徒たちが日本の学校文化をどのように受け入れているのかを知ることができた。ランチタイムでは、オーストラリアの生徒たちと自由に会話し、文化や習慣の違いを理解する貴重な時間となった。最終日のFarewell Partyでは、流しそうめんを楽しんだり、オーストラリアのダンスを一緒に踊るなど、楽しい交流が行われた。この姉妹校交流を通じて、生徒たちは国際的な視野を広げ、異文化理解を深めることができた。また、言語が異なる中で、生きたコミュニケーションを実践的に学び、英語力の向上にもつながった。

マクレラン高校生と一緒に授業を受ける様子

成　果

この姉妹校交流を通じて、生徒たちは異文化理解を深め、国際的な視野を広げた。ホームステイやバディ制度でオーストラリアの文化や日常生活を体験し、実践的なコミュニケーション能力を向上させた。授業や部活動を通じて、教育の違いや学校文化の多様性を学び、柔軟な思考を養った。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

実践内容❷

「韓国おもてなし隊結成！」

ねらい：姉妹校の受け入れにあたり、企画から当日運営を任せることで生徒の主体性を引き出すこと。

書道部員と一緒に書道体験

2023年４月、姉妹校である韓国観光高校が、コロナ禍での中断をはさんで５年ぶりに本校を訪問した。中断前の交流の様子を知る教員も少ない中、国際教養科の生徒に呼びかけて「韓国おもてなし隊」を結成し、訪問当日に向けての準備を進めた。約30名の生徒が集まり、ウェルカムセレモニー、生徒との交流行事、授業見学、全体セレモニー、部活動体験と、教員がおおまかに設定した当日の日程について、生徒主体でプログラムの詳細を練り上げていった。約２か月の準備期間の中で、ほぼゼロからの企画に悪戦苦闘しながらも、総隊長や各パートのリーダーが主導的な役割を果たしていった。当日は大いに盛り上がり、日韓の生徒たちが交流を楽しむ様子が各所で見られた。

成 果　準備が大変だった分、交流を終えた生徒たちには充実感・達成感がにじんでいた。教員の私たちにとっても不安な点が多い久々の訪問受け入れとなったが、教員が前に出過ぎず生徒に任せても充実した活動にできるということを示すことができた。

実践内容❸

「国際理解講演「宇宙を仕事の現場にして」」

ねらい：生徒が持続可能な社会の創り手となる第一歩を踏み出すきっかけとなるような講演を提供する。

講演中の岡田光信氏

2024年度は、スペースデブリ（宇宙ごみ）の回収に取り組むアストロスケールの創業者兼CEOの岡田光信氏に「宇宙を仕事の現場にして」の演題でお話いただいた。宇宙に関して全くの素人の状態から700本もの論文を読みまくり、分からないことがあれば執筆者のところまで話を聞きに行くことを繰り返し、宇宙ごみ回収をビジネスとして確立していったという。そして今では、宇宙環境や宇宙ビジネスに関する第一人者であり、国連から講演者として招待されるほどの専門家となっている。岡田氏は、「夢は人に笑われるくらいがちょうどいい」と言い、夢を実現するための方程式は「実現＝思考×行動」であると紹介してくださった。生徒が夢への一歩を踏み出すことを応援するような講演であった。

成 果　講演後には、感銘を受けた20名ほどの生徒が校長室に集まり、「岡田光信氏を囲む会」が自然発生的に行われた。また講演後の感想からも、持続可能な社会の創り手となるための行動の第一歩につながる大変刺激的な講演となったことがうかがえる。

おわりに

生徒主体での交流や講演会をとおして、生徒は自律性や国際関係の出来事に対する興味関心を高め、視野を広げたり、国際理解を深めたりしている。本校では、この他にも国際探究科を対象にした国際理解講演の定期実施や国際理解研修（東京方面）を実施し、異文化理解を深めたり、自身の視野を広げたりする機会を多く提供している。このような様々な機会をとおして、グローバル社会でリーダーとして活躍する資質を育み、将来行動に移していってくれることを願っている。

北高

名古屋市立北高等学校

住　所：〒462-0008 名古屋市北区如来町50番地
連絡先：TEL 052-901-0338　FAX 052-902-1596
H　P：https://www.nagoya-c.ed.jp/school/kita-h/

創　立：1963年
学級数：21
生徒数：824人

生物多様性　海洋　減災・防災　気候変動　エネルギー　環境　文化多様性　世界遺産・無形文化遺産・地域の文化財等
国際理解　平和　人権　ジェンダー平等　福祉　持続可能な生産と消費　健康　食育　貧困
エコパーク　ジオパーク　グローバル・シチズンシップ教育（GCED）　その他関連分野

SDGsアクションを起こす人材の育成

はじめに

本校は、2015年度から国際理解コースを開設し、NPOへの活動協力をとおしてESDに積極的に取り組んできた。2018年にユネスコスクールとなり、その活動をホールスクールアクションにしていくために、翌年に「ユネスコ委員会」を立ち上げた。自主的な活動の継続を目指し、生徒自身の当事者意識を高める活動から始め、生徒による生徒のための企画を実践している。SDGsの啓発活動や活動実践をとおして、生徒たちがグローバルイシューを自分事として捉え、身近な活動から自発的に行動を起こすことを支援している。

実践内容❶
「ユネスコスクールとしての活動」

ねらい：生徒がSDGsを身近に感じ、問題解決に向けて自ら問いかける力を育成する。

本校では毎年、学年やコースを対象にSDGsに関連する講演会を催している。本年度もユネスコスクール講演会、企業講演会、ICAN講演会、異文化理解講演会、ODA講座等、数多くの講演会を企画した。豊かな知識や経験をもった講演者の話を聴き視野を広げる機会となっている。

本校に勤務するキャリアナビゲーターの呼びかけによって、今年度新たに「イベント企画チーム」が立ち上がった。委員会はこのチームと共同してさらに活動の幅を広げている。例えば、昨年度より続けているアップサイクル活動では、講演者を招いて段ボール財布作りを体験したり、そのノウハウを「なごや未来ポケットのワークショップ」で子供たちに紹介したりするなど行った。また、地元の名産を学び発信しようと、地元の方やJAの協力を得て味鋺芋（あじまいも）の栽培にも挑戦した。収穫後は創作スイーツの販売や、イモのツルを使ったアップサイクル（リース作り）も行っている。この他にも、使用済みランドセルの回収を行い、活動家の方を通じてアフガニスタンに送るという取組も実践した。

味鋺芋プロジェクト

成　果

多くの具体的な「お手本」に触れること、リアルな「体験」を増やすことで、SDGsという言葉や概念を自分の生活と結びつけて考える習慣が身に付く。小さなアクションが地球規模の成果を生み出す第一歩となることを学び、自分たちにできることは何かを考え、さらに実践に移すことができるようになった。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

実践内容❷
「ユネスコ委員会の活動」

ねらい：生徒が自ら問題を見つけ、その問題への取組を自ら発案し、実践していく力の育成。

生徒会の委員会の一つであるユネスコ委員会は、各クラスから選出された１名と有志参加者で成り立っている。毎年様々なプロジェクトを実践し、年間行事として定着している活動もある。本年度も「学校祭フェアトレード雑貨販売」、「SDGs映画上映会」、「書き損じはがき回収」、「フェアトレードチョコレート販売」、「コンタクトレンズ空ケース回収」等、様々なアクションを起こすことができた。フェアトレード商品の販売について、本年度は名古屋市青少年交流プラザで開催された夏祭りでも実施する機会を得た。収益は全て慈善団体に寄付している。

フェアトレード商品の販売

成 果　SDGsについて学ぶ機会は増えても、全ての生徒が自分事として行動に移すことは難しい。しかし、活動の種類が増えることと一定の活動を継続することが、多くの生徒にとって自発的に参加してみようと思う機会を増やすことにつながっている。

実践内容❸
「ユネスコスクール交流会に参加して」

ねらい：ユネスコスクール間の交流を深め、お互いのプロジェクトから学びあう。

ユネスコスクール交流会に参加し、ユネスコスクールとしての本校の取組を報告した。生徒はプレゼンテーションの練習にも余念がなく、十分準備をして臨んだ発表は無事に成功を収めることができた。例年、ユネスコ委員会の設立と、前年度後半から本年度前半までに実践した活動について報告している。当日は、数多くの展示ブースを見て回り、ユネスコスクールに加えて、地域の企業や市町村のSDGsへの取組について学んだ。

ユネスコスクール交流会

成 果　他校の取組だけでなく自分たちの周辺社会の活動を広く知る機会をもつことができ、様々な気づきや学びを得ることができた。また、大勢の前で発表をすることで問題意識を共有し、発信することへの自信につながり、大きな成長へと結びついた。

おわりに

委員会を中心とする自主的な実践活動が増えている。ユネスコ書き損じはがき回収や、コンタクトレンズ空ケースの回収といった他団体の活動への参加だけでなく、本校独自の活動となるフェアトレード推進活動も、定例行事として定着しつつある。本校のモットーは「楽しくサステナブルな活動」である。SDGsは、地球上に生きる誰もが向かうべき目標であり、達成されるまで行動し続けることが求められる。継続するためにも「楽しさ」を意義ある活動へつなぎ、世界に目を向け、「できる」ことから行動する力を生徒の中に育んでいきたい。

名古屋市立山田高等学校

住　所：〒452-0817 名古屋市西区二方町19-1
連絡先：TEL 052-501-7800　FAX 052-504-2968
H　P：https://www.nagoya-c.ed.jp/school/yamada-h/

創　立：1978年
学級数：23
生徒数：882人

生物多様性　海洋　**減災・防災**　気候変動　エネルギー　**環境**　**文化多様性**　世界遺産・無形文化遺産・地域の文化財等
国際理解　**平和**　人権　ジェンダー平等　**福祉**　持続可能な生産と消費　**健康**　食育　貧困
エコパーク　ジオパーク　グローバル・シチズンシップ教育（GCED）　その他関連分野

YMD（やまだ）的ユネスコスクール

はじめに

山田高校は命・心・環境を大切にする「人間教育」の実践を掲げ、2012年に「ユネスコスクール」に認定された。スクールミッションは、命・心・環境を大切にする「人間教育」を実践する「ユネスコスクール」として、健やかで柔軟な心身の育成とともに、社会について興味をもち、主体的に関わりながら、自らの進路目標を実現できる人材の育成を目指している。現在は「防災」「国際理解」の実践活動にも幅を広げて取り組んでいる。

実践内容❶
「BMGSとの国際交流会をとおして、国際理解を深める」

ねらい：異文化交流を行う中で、国際理解を深め、異文化を理解し尊重・共生できる人材の育成を目指す。

2017年にオーストラリアのシドニー近郊にあるBMGS（Blue Mountains Grammar School）と姉妹校提携を締結し、隔年でホームステイ受入れを行っている。

2024年7月にBMGSの生徒44名が来日し、ホームステイ受入れと国際交流会を実施した。

前年度から、ホームステイ受入れに向けて事前学習会を重ねるとともに、国際交流会に向けて生徒が中心となって事前準備を進めた。

事前交流会は、ホストファミリーの本校生徒とBMGSの生徒が、ホームステイ受入れ前日にジブリパークを訪問し、事前に顔合わせを行うとともに、親睦を深めるため一緒にパーク内の散策を行った。ホームステイは、それぞれのホストファミリーが工夫をしてホストを家族で歓迎していた。

BMGSの生徒が本校を一日訪問して実施した国際交流会では、歓迎会、日本の学校授業の見学ツアー、書道と美術の体験授業でオリジナルうちわの制作、音楽と情報の交流授業、各クラスでのBMGSの生徒とのフリー交流タイム（拡大ランチタイム）、歓送セレモニーなどの国際交流プログラムを行い、お互いの国の文化について理解を深め合うことができた。

BMGSとの国際交流会

成　果

BMGSの生徒と積極的に触れ合うことで、異文化交流を行う中で、異文化に対する理解が深まり、国際理解を深め、異文化を理解し尊重・共生できる生徒を育成できる貴重な機会となった。また、BMGSの生徒と積極的にコミュニケーションを図ろうとするなど、主体的に行動する生徒が増えた。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
1 貧困をなくそう　2 飢餓をゼロに　3 すべての人に健康と福祉を　4 質の高い教育をみんなに　5 ジェンダー平等を実現しよう　6 安全な水とトイレを世界中に　7 エネルギーをみんなに そしてクリーンに

実践内容❷

「AED特別講習会をとおして、命の尊さを感じる」

AED特別講習会

ねらい：命の尊さを感じるとともに、救急救命の基礎を習得して主体的に行動できる人材の育成を目指す。

１年生の「保健」の授業で心肺蘇生法についての基礎的な知識・技能を学習した上で、さらに救急救命の技能を身に付けることを希望する生徒を対象に「AED特別講習会」を実施している。

特別講習会では、AEDトレーナー機器を利用した救急救命の実践訓練や様々な状況を想定した状況別訓練を実施している。救命訓練はモデル動作と自分の救命動作の撮影比較や、相互評価を反復実施することで、救命技術の向上につながるプログラムとしている。

本校の保健体育科の教員は、名古屋市消防局と連携して応急手当普及員資格を取得しているため、特別講習会の最終段階では生徒一人一人に「普通救命講習Ⅰ」の実技試験を実施し、合格した生徒には「普通救命講習修了証」を授与している。

成 果　AED特別講習会をとおして、技能の向上が確認できるとともに、生徒同士がきずなを深め、協働することを学ぶという成果もみられた。緊急時に直面してもAED機器の使用に臆することなく、居合わせた人々と力を合わせて主体的に行動できる生徒が育っている。

実践内容❸

「防災委員の取組をとおして、自然災害に備える」

防災教室講演会

ねらい：自然災害に備えることの大切さを理解するとともに、災害時に活躍できる人材の育成を目指す。

１・２年生の各クラスから１名の防災委員を選出し、委員会の活動をとおして、全校生徒の防災意識を高める活動に取り組んでいる。

１学期は、「災害予防」のための防災教育を目的として、防災委員が「防災施設見学」を行っている。２学期は、自然災害にどのように備えるべきかを学ぶとともに、災害発生時に地域社会においてどのように行動するべきかを考えるために、１年生全員を対象に「防災教室」を開催している。

年間２回「防災新聞」を発行し、全校生徒に自然災害に備えることの大切さについて啓発活動を行っている。また、入学時に非常用備蓄食を購入して学校に保管し、卒業時に返却する取組を行っているが、その試食会を実施して非常食の新規購入品の選定も行っている。

成 果　防災委員を中心とした取組をとおして、生徒の防災に関する知識や関心が高く保たれている。日頃から「災害予防」の観点をもち、住んでいる地域社会で何ができるのかを主体的に考えることができる生徒を育成することができている。

おわりに

探究的な要素を取り入れた学習活動の推進が一層求められているため、「総合的な探究の時間」を軸に探究学習の改善を図るとともに、ユネスコスクールとしての取組を外部に対して効果的に発信していくことが課題である。また、新型コロナウイルス感染症の感染拡大以前に実施していた人と人とのふれあいを大事にする行事については、外部機関と連携して実施していきたいと考えている。

今後も本校のユネスコスクールとしての取組を一層推進するとともに、SDGsの観点をより多く取り入れた本校らしい教育活動を進めていきたい。

名古屋市立名東高等学校

住　所：〒465-0064 名古屋市名東区大針1-351
連絡先：TEL 052-703-3313　FAX 052-703-3401
H　P：https:www.nagoya-c.ed.jp/school/meito-h/

創　立：1984年
学級数：27
生徒数：1,067人

生物多様性　海洋　減災・防災　気候変動　エネルギー　環境　文化多様性　世界遺産・無形文化遺産・地域の文化財等
国際理解　平和　人権　ジェンダー平等　福祉　持続可能な生産と消費　健康　食育　貧困
エコパーク　ジオパーク　グローバル・シチズンシップ教育（GCED）　その他関連分野

世界に臨み、高きを求め、みずから歩む
Go global！ Go higher！ Go for it！

はじめに

名東高校では、名東版ESDを独自に策定し、誰もが豊かで幸せに暮らせる社会を築くために、自ら学び、考え、行動することを目指す教育を行っている。

名東高校で行うほとんどの活動は、授業でも学校行事でもESDを意識して進められているが、特に「未来への探究」（総合的な探究の時間）と国際英語科の「ワールドスタディーズ」（学校設定教科）は、ESD活動の中心的な役割を果たしており、その一部を紹介する。

実践内容❶
「ワールドスタディーズ（WS）におけるゼミ活動」

ねらい：同じ問題意識をもつ仲間と社会の理想像を共有し、課題解決のためにできることを考え行動する。

１年生で学んだ社会的課題の中から興味のあるテーマを選び、その課題を解決するためのビジョンを立て、実際に行動する取組を行っている。１学期にグループを作り、１年間取り組む課題と活動方針を決定する。今年度は10のグループに分かれ、「同性婚」「フェアトレード」「日本の祭りを守る」「LGBTQ+」「防災」「ひとり親支援」などのテーマで活動を進めている。夏休みを中心に、NPO・大学・公的施設を訪問し、当事者の生の声を聞いたり、援助活動を体験したりした。これにより現場で起きている課題やニーズをより深く理解することができた。２学期には修学旅行中に姉妹校である韓国の城南外国語高等学校を訪れ、英語で発表し意見交換を行った。さらに特定非営利活動法人こどもNPOの協力を得て、アクションプランを作成した。冬休みを中心に、絵本を作成し名古屋市の児童館で読み聞かせをしたり、豊田市浄水交流館で減災講演会を実施したりと、具体的なアクションを行うことになっている。３学期には１年間の活動を振り返り、その成果と経験を後輩たちに発表する予定である。

城南外国語高校での発表

成　果

社会的課題の解決を目指して、自分たちで今できることを計画し行動すること、その過程で、親や教師とは異なる大人たちの助けを借りて物事を進めることが、より広い視野を身に付けることに役立っている。WSでの学びが、高校卒業後のキャリア形成に影響したという卒業生の声を聞くことも多い。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

実践内容❷
「貿易ゲームで世界の不平等を体感する」

**ねらい：貿易の仕組みを理解し
不平等なルールによる結果を体験し、
国際協力や経済の相互依存への理解を深める。**

貿易ゲームの様子

貿易ゲームは、生徒たちをグループごとに複数の「国」に分け、世界の貿易を疑似体験するワークショップである。各国には異なる資源や道具が割り当てられ、それらを活用して製品（例：紙を使った形や図形）を作り、それを「輸出」して最大の利益を目指す。ただし、各国に与えられる資源や道具は平等ではなく、ある国には高品質な道具が多く配布される一方、別の国には限られた道具しか与えられない。交渉や取引が重要となり、より多くの利益を得るために、他国との協力や戦略が不可欠である。また途中で気づかないうちにルール変更（例：関税や援助の導入）が行われる。ゲーム終了後には振り返りを行い、貿易の仕組み、不平等の現実と背景、国際協力の重要性について深く考える。

成 果　貿易において、国ごとに異なる資源配分や条件があることで起こる不平等の現実について考える機会となった。（生徒感想）元の資源の量とゲームの結果が比例していたので、自分たちの力だけではどれだけがんばっても結果は変わらないんだと実感した。

実践内容❸
「修学旅行をとおして行う平和探究」

**ねらい：被爆地・広島を訪れ、現地の方と触れ合う中で、
平和構築のためにできることを考える。**

絵本『おりづるの旅』翻訳シール貼り

２年生の総合的な探究の時間「未来への探究Ⅱ」において、広島への修学旅行をとおして「平和探究」を行った。１学期に被爆地・広島に関して班で調べ学習を進め、２学期には研修地ごとに分かれて学習した。修学旅行１日目は、被爆者講話、広島平和記念資料館見学、ボランティアガイドさん（広島被団協の方々）による平和公園内散策を行った。２日目には、似島、大久野島、海上自衛隊第一術科学校、ANT-Hiroshima（NGO）など11か所の中から選んだ研修地を班ごとに訪れ、現地の方々のお話を伺い、学びを深めた。その後、修学旅行をとおして行った「平和探究」の成果をまとめつつ、「平和構築のためにできること」を考え、１年生に向けてプレゼンテーションを実施した。

成 果　実際に広島を訪れて被爆した建物や遺品を見たり、現地の方のお話をお聞きしたりすることで生徒は心を揺さぶられ、平和の大切さを実感することができた。研修の成果物を外部に発信して新たなつながりをもった生徒もいた。

おわりに

「未来への探究Ⅱ・Ⅲ」や２年生の「ワールドスタディーズ」では、課題に取り組んできた成果を下の学年に発表するようになった。上級生は下級生に見てもらうことを意識して、より調査研究やアクションに身が入り、伝え方にも工夫が見られるようになってきた。また、後輩たちも「こんなこともできるのか、もっとやってみたい」と、次の年にさらに良いものに仕上げる好循環ができつつあると感じている。

名古屋経済大学市邨（いちむら）高等学校

住　所：〒464-8533 名古屋市千種区北千種3-1-37
連絡先：TEL 052-721-0161　FAX 052-721-1222
H　P：https://www.ichimura.ed.jp/

創　立：1907年
学級数：41
生徒数：1,338人

生物多様性　海洋　減災・防災　気候変動　エネルギー　環境　**文化多様性**　世界遺産・無形文化遺産・地域の文化財等
国際理解　**平和**　**人権**　**ジェンダー平等**　福祉　持続可能な生産と消費　健康　食育　**貧困**
エコパーク　ジオパーク　**グローバル・シチズンシップ教育（GCED）**　その他関連分野

国境を越えて、協働して取り組む国際貢献活動

はじめに

私たちは、戦争等で自国を追われた難民や、戦争等を起因とした貧困環境で暮らす子供たちを支援している人々との協働活動を2018年度から始め、企業・地域の方々、国内外の高校とパートナーシップ協定を結んで活動している。特に大切にしていることは、現地に必要な「支援」を届けるために現地の状況を深く学ぶことである。ICT機器を活用しリアルタイムに現状を知ることができている。活動の状況は各種報告会を通じて全国に届けている。

実践内容❶
「シリア・パレスチナ難民の経済的自立を応援したい」

ねらい：現地の情勢を専門家から深く学び、戦争や紛争で自国を追われた人々の自立を応援する。

紛争地域から難民キャンプ等へ逃れた人々も紛争がなければ私たちと同じ生活を送っていた。自国を追われた難民の経済的自立を支援する林芽衣さんと知り合うことができた私たちは「難民女性の力になりたい!」との思いからフェアトレードの仕組みを学んでフェアトレード活動を始めた。年に数回、学校内外でチャリティバザーを開催している。学校文化祭や毎年10月に開催されるSDGs Aichi EXPOでブースを出展し、林さんの取組を紹介し、難民女性の製作したバッグやポーチなどを販売している。6月の「世界難民の日」はUNRWA医療局長の清田明宏さん、ヨルダンの難民キャンプで難民女性の経済支援をされている林芽衣さんから、難民に対する人道支援の大切さを学んだ。

2022年2月に始まったロシアのウクライナ侵攻、2023年11月に始まったイスラエルのパレスチナ自治区のハマスへの攻撃など紛争が絶えない。国連UNHCRの報告によると難民は1億人を超え今も増え続けている。この現状を多くの人に知ってもらうため、本校では毎年2月に「難民支援の夕べ（今年度で7回目）を開催している。2023年の2月はTBS記者の須賀川さん、2024年3月は京都大学の大川教授とそれぞれ対談した。また難民映画を上映することで虐げられている人々の現状を報告した。

感謝状
(Thank you letter)

「世界難民の日」に開催したパートナーシップ協定校との協働学習会の様子

成　果

パートナーシップ活動をとおして、同じ地球の人間として当事者の心に寄り添うことの大切さを学んだ。同じ地球に生きる「地球市民」として、戦争を引き起こさないためにも日頃から交流し、相手を正しく理解し協働活動に取り組むことの大切さを学んだ。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

実践内容❷

「カンボジア貧困地域の子供たちの力になりたい」

鉄棒贈呈式（カンボジアの小学校）を見守る生徒たち

ねらい：紛争に起因する貧困や教育格差問題について深く学び、子供たちの力になる。

新型コロナウイルス感染症が世界中に広がる前の2019年にカンボジア貧困地域の教育格差問題に取り組むNPO法人と知り合うことができた私たちは、同法人が約10数年前に建設した小学校について対談した際に、家庭の事情で小学生が学校に通えない現実を知った。少しでも学校生活が楽しくなる仕組み作りとして日本の学校には当たり前にある遊具がカンボジアの学校にはなかったため、遊具を贈るための資金作りとして、パートナーシップ協定校がそれぞれの学校の文化祭などでチャリティバザーを行い、その収益金を送っている。2020年と2021年はコロナ禍で手に入らないマスクを自作し、韓国や台湾などの海外の高校とも協力して送った。マスクは２年間で約33,000枚を集めた。2022年の夏は企業とも協力して手洗い場、2023年の夏は鉄棒資金をそれぞれ寄贈した。2024年の夏は完成した鉄棒で遊ぶ子供たちとオンラインで交流した。

成 果

現地に必要な支援を行うためには現地の状況を知ることが大切であることを学んだ。また、活動を行うにあたっては、たくさんの人々の協力が必要であることを学んだ。そのために、自分たちが学んだことを校内外へ伝える活動の大切さを学んだ。

実践内容❸

「パートナーシップで取り組む国際平和貢献活動」

来日したパートナーシップ校（台湾）の高校生と日本文化体験

ねらい：企業や専門家などから学び、ともに活動する仲間（パートナー）作りを大切にしたい。

国際平和貢献活動を実施するためには、企業やNPO法人など専門家の方々から学ぶことが大切である。また、実際に活動するためにはより多くの人々の協力が必要である。そこで、同じ思いをもつ人々と連携するために、パートナーシップ協定を結んで活動した。「平和の架け橋プロジェクト」と名付け、困っている人たちと企業・私たちの活動が架け橋となってつながり、このつながりが連鎖反応を繰り返して広がっていくことを強く願っている。

2023年12月の台湾に加えて、2024年11月に韓国の学校を訪問して、両校が互いの活動を報告しあう交流を実施した。今後もパートナーシップ協定校間のつながり（連携）を深めていきたい。

成 果

企業や国内外の学校と連携して行った活動（2018年から2024年の７年間）
カンボジアのNPO法人とのオンライン対談（17回）・ヨルダンのトライバロジーとの対談（11回）・台湾とのオンライン交流（12回）・韓国とのオンライン交流（８回）・国内の専門家との対談（９回）・国連UNHCR学校パートナーズ難民映画祭（５回）・服のチカラプロジェクト学習会（４回）・台湾および韓国へのユネスコ活動交流研修旅行（各１回）・台湾からの活動交流校受け入れ（１回）

おわりに

ユネスコ憲章の前文にある「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。」とあるように、同じ地球に生きる「地球市民」として、かけがえのないこの地球を守っていくためにも、それぞれの国が、平和の尊さを認識するために日頃から交流することの大切さを学んだ。お互いの国の歴史や文化を知り尊重し合うことで、同じ地球市民であることを自覚し、戦争や紛争のない平和な地球の実現に寄与していきたい。ウエルビーイングに向けた取組を、パートナーシップを通じて継続していきたい。

中部大学第一高等学校

住　所：〒470-0101 日進市三本木町細廻間425
連絡先：TEL 0561-73-8111　FAX 0561-73-8031
H　P：https://www.chubu-ichi.ed.jp/

創　立：1938年
学級数：36
生徒数：1,099人

生物多様性　海洋　減災・防災　気候変動　エネルギー　環境　文化多様性　世界遺産・無形文化遺産・地域の文化財等
国際理解　平和　人権　ジェンダー平等　福祉　持続可能な生産と消費　健康　食育　貧困
エコパーク　ジオパーク　グローバル・シチズンシップ教育（GCED）　その他関連分野

ESDコースプログラム「探究と創造」

はじめに

本校の建学の精神は「不言実行、あてになる人間」である。本校では、建学の精神とユネスコスクールの三つの重点分野を包括するコンセプトを「ICT×ESD×探究」と定めている。現在、「探究と創造」をテーマに「ESDコースプログラム履修制度」として成立する多様なESD・SDGsカリキュラムを通じて10の「ESD資質能力」を育むことを目的とした学びの仕組み作りを進めている。

実践内容❶
「Global Project（グローバル系）」

ねらい：国際社会に求められる国際感覚と幅広い教養、グローバルな視点を養う。

普通科文理探求コースでは２年次よりグローバル系という選択系を設けている。グローバル系では、外国語や地歴を中心とする教科横断型・探究型のグローバル科目〈プロジェクトスタディ／クリエーティブ表現／国際文化研究〉を設定しており、地域や国際に関わる探究、マーケティング、情報発信の方法などを学んでいる。「Accessibility」や地元企業と連携した「商品開発」に関するプロジェクトを設定しており、名古屋市内や修学旅行先のグアムでフィールドワーク調査を実施した。併設校である中部大学との高大連携授業も充実しており、大学での研究活動発表にも参加している。

高大連携発表

主な研究発表実績

〈中部大学国際関係学部２年次授業「国際応用演習A」〉
「Spice & Food Culture －Philippine&Brazil－」

〈ESD AWARD〉
「地域資源をヘアバームに」
「ヌーベルキュイジーヌの「新たな」可能性
－日仏食文化の比較研究から－」
「ジェンダー多様性からみる私たちの世界」

〈田舎力甲子園2024〉
「愛知と世界をつなぐ －Gibier×Accessibility－」

成　果

グローバル科目での実践的な学びは、地域連携や高大連携の発展につながっている。創造力や企画力の向上が見られ、田舎力甲子園ではファイナリストに選出されるなど外部評価も得ている。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

実践内容❷
「ESDコースプログラム」

ねらい：創造的な探究活動を通じたESD資質能力の向上。

本校では総合的な探究の時間を「ESD探究」と位置づけ、各生徒が独自の調査、研究を進めている。「ESDコースプログラム」は、探究を中心に、本校の一連のプログラムへの主体的・継続的な参加、研究レポートの提出、研究発表、口頭試問を経た生徒を「ESDコースプログラム履修生」として認定する制度である。2024年度は３年生14名の研究（以下・共同研究を含む）を認定した。

「Aichi's Accessible
－アクセシビリティ調査に基づくWEBデザインと分析－」
「世界の発酵文化とBENTO
－「発酵」×「ジビエ」＝「地域の名産」を開発する－」
「地域の香りのイメージパレット」
「高山本線の在り方」

〈主なESDプログラム〉
- ESD AWARD／一高発表会：ESD・SDGs探究成果発表会
- ESD CREATIVE AWARD：SDGsをテーマに自由に創造する「表現力」を養うコンテスト。優秀作品については「ESD EXHIBITION TOUR 2024 COLOURS」と題した愛知県内11会場を巡る展示ツアーにて一般公開した。
- ESD国内研修：長野県白馬村の企業や行政と高校生が連携を進める国内研修
- ESD海外研修：カンボジアの世界遺産であるアンコール遺跡群の修復活動と寺子屋交流を実施する海外研修プログラム
- 国際デー探究：国際デーをテーマに全校を対象に探究活動及びコンテストを実施
- 探究ライブラリー：探究成果の審査を経て専用WEBサイトで生徒及び教員に成果を共有するシステム
- Global Lounge：留学生との意見交換や探究的な学習の場

ESDコースプログラム認定審査会

〈ESD資質能力〉
探究及びESDプログラムについて「ESD資質能力」評価を行っている。自己分析調査も年に２回実施している。

①持続可能性／SDGsに関する知識・理解・スキル習得
②持続可能なライフスタイルの実践　③情報収集・選択・活用力
④論理的思考力　⑤批判的思考力　⑥創造力（応用力・企画力）
⑦発信力（言語化力・プレゼンテーション能力）
⑧行動力（主体性・課題発見能力・責任感・リーダーシップ）
⑨協働性（傾聴力・柔軟性・合意形成と協力）
⑩多様性と共生の尊重

ESDプログラム・ユネスコスクールに関わる活動の詳細については、以下のWEBサイトで確認できる。
〈CHUBU１ ESD&ASPnet〉
https://sites.google.com/chubu-ichi.ed.jp/cu1-esd/

SA全国大会

成 果

プログラムの充実により、主体的な研究活動が増えている。ESD資質能力調査では特に⑥⑦において得意意識の向上がうかがえる。優秀な研究活動はサステナブル・ブランド国際会議2024 東京・丸の内Student Ambassador全国大会への出場（ESD部）などにもつながっている。

おわりに

一連のESDコースプログラムの発展は、生徒のESD資質能力の向上と進路指導の充実、外部評価へとつながっている。本校独自の探究教材及びプログラムの改良と教育支援システム（探究アドバイザリーアワー・探究ライブラリー・ESD資質能力分析シートなど）の更なる充実化を図り、教育の質の向上とプログラムへ参加しやすい環境作りを目指す。

日本福祉大学付属高等学校

住　所：〒470-3233 知多郡奥田中ノ谷2-1
連絡先：TEL 0569-87-2311　FAX 0569-87-2312
H　P：https://www.n-fukushi.ac.jp/koukou/

創　立：1958年
学級数：21
生徒数：728人

生物多様性　**海洋**　**減災・防災**　気候変動　エネルギー　**環境**　**文化多様性**　世界遺産・無形文化遺産・地域の文化財等
国際理解　**平和**　**人権**　**ジェンダー平等**　**福祉**　持続可能な生産と消費　**健康**　食育　貧困
エコパーク　ジオパーク　グローバル・シチズンシップ教育（GCED）　その他関連分野

未来社会を担う自律したリーダーの育成

はじめに

本校では、2018年にユネスコスクールに加盟をし、総合的な探究の時間「Global FUKUSHI Studies」をESD教育の基幹科目として位置づけ、1年次からⅠ、Ⅱ、Ⅲと年次段階的に進行し、持続可能な共生社会に貢献する人材を育成している。特にGFSⅡでは、地元美浜町と連携をしたPBL（課題解決型学習）に取り組んでいる。

実践内容❶
「『減災教育プログラム』の助成校としての取組」

ねらい：校内の防災・減災の意識を高めるため、地域と連携した避難所運営支援をとおして、高校生を地域の支援力に変える。

「減災教育プログラム」は、日本ユネスコ協会連盟がアクサ生命保険の協力を得て、東日本大震災の経験や教訓を全国の学校防災につなげることを目的に始まったプログラムである。今回の取組では、美浜町防災課、あいち防災リーダー会、日本赤十字社愛知県支部、赤十字奉仕団の方々に御支援をいただき、避難所運営において、高校生が支援できることは何かを考える取組を計画し、実践重視の学習を行った。その際にそれぞれの取組の講師と意見交換を行い、災害が起こったときに、どういったところで、高校生の力が必要になるか、その点の確認も行った。

段ボールベットを組み立てる生徒たち

また東日本大震災の当事者から学ぶ実践として、11月2日に元石巻西高校の校長先生でもある齋藤幸男先生をお招きし、公開授業を行った。災害時を想定し、学園関係者、美浜町職員の方、地域の防災関係者にも呼びかけ、地域の関係者と共に学んだ。非常時にも常識に捉われてしまう大人たちの中で、子供たちのもつ柔軟性が、生と死が隣り合わせで存在する避難所において、いかに生きる力となったかを、熱心にお話をいただき、生徒たち自身も自分たちの役割が確認できた授業となった。

成　果

避難所運営においては、高校生自身がある程度避難所の全体像を理解できていることが重要であること、そしてそれぞれの役割をつないでいく役割が適していることが理解できた。それらの点を踏まえて、地元美浜町の防災課とともに、高校生が災害時に行動できる講習プログラムを今後作成する予定である。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

実践内容❷

「夏季教員研修 ESD教育とグランドデザイン」

夏季教員研修

ねらい：新学習指導要領とESD教育の関係性等、令和の学校教育が進むべき方向性の理解を深める。

本年度は、愛知県教育委員会から、教員研修のための講師派遣の支援をいただいたため、江東区立八名川小学校の元校長で、「ESD，SDGs推進研究室」室長として、現在も多方面で活躍をされている手島利夫先生をお招きし、全教員向けの研修を夏休みに行った。今回の研修については、きちんとESD教育とは何かをきちんと全教員が理解できること、その取組を、どう学校教育の中の実践に落とし込めるのかを中心に講演をいただいた。一般的な内容で終わらないように、本校のグランドデザインとの関連性についても手島先生に整理をしていただいたため、グランドデザインの理解にもつながったという意見が感想として寄せられた。

成 果　本校では、総合的な探究の時間に主にESDに取り組んでいるが、総合的な探究の時間が教科担任制で実施しているため、なかなか全体の理解につながっていなかった。今回の研修を経て、ESDの基本を全体が理解できる研修となった。

実践内容❸

「2024年度『高校生防災セミナー』へ参加」

高校生防災セミナーでの発表

ねらい：昨年度採択いただいた「減災教育プログラム」の内容を引き継ぎ、校内に更なる防災意識を高めるため。

昨年度の「減災教育プログラム」に取り組んだメンバーの中から、代表者を選出し、名古屋大学や、愛知県防災局、愛知県教育委員会が主催する、高大連携高校生防災教育推進事業「高校生防災セミナー」に参加をした。今年度から２日間の日程となり、初日は夏休みに、名古屋大学にて、災害に関する知識を身に付けた。その後２学期の活動期間の中で、避難訓練の見直しや、公開見学会をとおしての中学生への広報活動、生徒身分証への緊急時情報掲載の提案などを行い、その実践報告を、冬休みに、２日目の活動として、報告をした。２日目には、DIGの研修もあり、いつも地域でお世話になっているコーディネーターさんとともに、災害時の地域の課題についても学ぶことができた。

成 果　「減災教育プログラム」でできた、地域とのつながりを継続して生かすことができた。非常時には、生徒たちの活動が力となるため、日常の取組においても、生徒の意見を反映し、今後も改善に努めたい。

おわりに

この２年間、美浜町と連携して行っている２年生総合進学コースの総合的な探究の時間「GFS II」において、その中の一つのテーマである「防災」の活動を深めることができた。災害時などの非常時のためにも、地域の人々ときちんと顔が見える関係性になっておくことの大切さを学ぶことができた。また生徒たちも、自分たちが頼りにされることで、自分たちの役割を自覚したようである。これからも地域と協力をして、ユネスコスクールの取組を広げていきたいと考えている。

認定NPO法人 愛知シュタイナー学園 初・中・高等部

認定特定非営利活動法人 愛知シュタイナー学園

住　所：〒470-0115 日進市折戸町笠寺山42-13
連絡先：TEL 0561-76-3713　FAX 0561-76-3713
H　P：https://www.aichi-steiner.org

創　立：2009年
学級数：11
児童・生徒数：78人

生物多様性　海洋　減災・防災　気候変動　エネルギー　環境　文化多様性　世界遺産・無形文化遺産・地域の文化財等
国際理解　平和　人権　ジェンダー平等　福祉　持続可能な生産と消費　健康　食育　貧困
エコパーク　ジオパーク　グローバル・シチズンシップ教育（GCED）　その他関連分野

自然・歴史・世界とのつながりを感じて学ぶ

はじめに

私たちの日々の暮らしは、季節の巡り、自然の営みと結びつきながら歴史として積み重ねられ、今の世界の様々な姿がある…季節の祝祭、行事も含めた年間全ての学校生活と学びの中で子供たちがそれを実感できるように、教師と保護者で力を合わせて取り組んでいる。大人たちの取組もありますが、ここでは子供たちの学びの実践から報告する。

実践内容❶「自然と文化、ESDの学びと体験」

ねらい：対馬の歴史と自然を学び、体験する。

中学２年生、３年生の生徒たちに、10月４日から10日までの６泊７日、福岡・対馬への研修旅行を実施した。福岡では他校との交流と、初めてのホームステイを体験した。対馬では、博物館の見学をとおして改めて日本の歴史の中での対馬の果たした役割と、大陸とのつながり、豊かな自然や動植物について学んだ。環境スタディを主宰する対馬CAPPAの方々から海洋プラスティックごみについての講義を受け、その後シーカヤックを体験し、無人島に到着後、ごみを拾った。また対馬固有の在来種「対州馬」のお世話と乗馬体験を行い、ツシマヤマネコについて学び野生生物保護センターを訪れるなどした。最終日には農泊の宿に宿泊し、対州そば粉を使った10割蕎麦打ちやそば餅作りなど、対馬の郷土料理を味わった。韓国に最も近い島である対馬の素晴らしい自然とそこに生きる人々の想いを知る機会となり、歴史についても改めて実感をもつことができた。

シーカヤックで無人島へ

成　果

島の自然や文化を実感することができた。第２外国語として１年生から韓国語を学んでいる子供たちにとって韓国とのつながりをより実感できる機会となった。高等部で韓国のシュタイナー学校との交流を予定しており、対馬とその歴史を知ることは、その学びを深めることにもなる。野生動物の保護や海洋保全について実際の取組を体験的に学ぶことができた。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
1 貧困をなくそう　2 飢餓をゼロに　3 すべての人に健康と福祉を　4 質の高い教育をみんなに　5 ジェンダー平等を実現しよう　6 安全な水とトイレを世界中に　7 エネルギーをみんなに そしてクリーンに

実践内容❷
「伝統文化の継承」

和太鼓の練習風景

ねらい：和太鼓、狂言に取り組み、伝統文化を体験的に味わい、発表に向けて力を尽くす。

1）小学６年、中学１年生

２か月にわたって「和太鼓ユニット光」の羽田康次先生のレッスンを受け、学園の公開行事である2024年５月26日のにじいろ祭りで発表した。骨格、筋肉がしっかりしてくる年齢で、重心を低く構え、腹の底から声を出し、力強く太鼓を打つことに取り組み、チームとして気合を合わせ、助け合い、励まし合って練習を重ねた。

2）中学２、３年生

2023年の秋に名古屋能楽堂における小学生・中学生を対象とした能楽鑑賞会に参加。その後、狂言師の井上松次郎先生から講義を受け、10回の体験授業を実施していただいた。2024年１月26日に、学内の生徒および保護者に向けて２回の発表を行った。

成 果　和太鼓は一般来場者の前で、練習の時以上の声を出し、子供たち自身満足のいく発表ができた。狂言では、姿勢、発声の基本を学び、長いセリフや所作を覚えることは大きな挑戦であった。衣裳をつけ、「井杭」を全部演じ、観客に届いて笑いが出たことが自信になった。

実践内容❸
「ドイツ・スイス研修 ～国際交流・異文化理解の旅～」

ユースカンファレンスのテーマ

ねらい：南ドイツで約200人の若者が集って行われたユースカンファレンスに参加、交流し、異文化理解を深める。

高校３年生の生徒３名に、2024年５月10日から６月４日までドイツ・スイス研修を実施した。ドイツのコンスタンツ自由ヴァルドルフ学校を会場として開催されたユースフェスティバルに参加し、５日間にわたって、世界中から集まった若者と共に過ごし、生き甲斐についての講座とワークショップに参加した。様々な機会に英語とジェスチャーでコミュニケーションを図り、夜の交流会では、浴衣を着て演奏、コーラスを披露。またドイツのシュタイナー学校の先輩を訪ね、現地の生徒と交流、中世の街並みや教会を見学。自分たちで計画して、情報を探し、チケットを購入して学生料金でバレエを鑑賞。なんとか英語で切り抜けることができた。

成 果　同世代の世界の若者との交流で刺激を受け、多様な意見、考え方に出会い、英語でもっとコミュニケーションしたい思いが高まった。海外で学んだり、キャリアを踏み出している先輩から直接話を聞き、将来への展望を広げることができた。

おわりに

毎日の学びや生活で自然の営みを味わい、感謝するところから、環境保全、食の安全等に配慮したライフスタイルが育まれるよう積み重ねている。専門家に御指導いただく発表行事では、毎年積み重ねて学園への御理解も深く賜り、質の向上を実感している。高等部では農業実習、職業実習、介護福祉実習、国際研修など社会と世界へ踏み出す機会を用意し、語学や歴史の学びもそれを意識している。国際交流では世界中にあるシュタイナー学校のネットワークを活用している。

愛知県ユネスコスクール交流会

全国一の規模を誇る愛知県のユネスコスクールの支援とESD（持続可能な開発のための教育）活動の広がりをねらいとして、ESD活動やSDGsに関心のある小学校、中学校、高等学校、特別支援学校、大学の児童生徒、学生、教職員、行政、団体が集う交流会を開催しました。ESD（持続可能な開発のための教育）活動の紹介を通じて、持続可能な社会作りの重要性について未来を担う子供たちが学び合いました。ここに集う子供たちの輝く笑顔は、私たちの心にESD活動の大切さと未来への希望を届けてくれました。

「2024年度愛知県ユネスコスクール交流会」は、Aichi Sky Expo（愛知県国際展示場）で2024年10月10日(木)から10月12日(土)まで開催する「SDGs AICHI EXPO 2024」においてプログラムの一つとして実施しました。

日 時　ブース発表：2024年10月10日(木)から2024年10月12日(土) 午前10時から午後５時まで
ステージ発表：2024年10月12日(土) 午後３時15分から午後４時45分まで

会 場　Aichi Sky Expo（愛知県国際展示場）展示ホールA
※ステージ発表のもようは、「SDGs AICHI EXPO 2024」公式ホームページからオンライン配信も行いました。

主 催　愛知県教育委員会

後 援　日本ユネスコ国内委員会、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）、
中部ESD拠点協議会、ESDコンソーシアム愛知

ポスター展示　10/10(木)～12(土)

展示内容

豊橋市立玉川小学校
次郎柿でつながれ！農業の輪

次郎柿の産地のふるさと玉川。郷土を愛し、地域の方と触れ合う栽培活動報告

名古屋市立山田高等学校
「国際理解」～YMD（やまだ）的ユネスコスクール～

今年度、姉妹校のブルーマウンテンズグラマースクールが来校した際におこなった国際交流の様子や成果の報告

日本福祉大学付属高等学校
地域との連携した防災・減災教育の実践

令和５年度にアクサ・ユネスコ協会の第10回「減災教育プログラム」の助成校として取り組んだ実践の報告

名古屋大学教育学部附属中・高等学校
国連訪問を通じた日本の国際社会における役割の理解

国連訪問を中心に国際社会における日本の役割について理解を深め、多文化共生や国際理解に関わる活動の報告

愛知シュタイナー学園
ドイツ・スイス研修～国際交流・異文化理解の旅～

南ドイツで約200人の若者が集まって行われたユースカンファレンスへの参加を中心とした研修報告

成果物展示　10/10(木)～12(土)

展示内容

中部大第一高等学校
ESD EXHIBITION TOUR 2024
COLOURS ENCORE

名古屋経済大学市邨高等学校
シリアおよびパレスチナ難民女性が製作した民芸品

名古屋大学教育学部附属中・高等学校
私たちの将来を大きく左右する地球環境
－モンゴルの高校生との共同研究－

ワークショップ　10/12(土)

ワークショップ内容

名古屋大学教育学部附属中・高等学校
「葉脈標本のしおり作り」

葉脈をとおして身近な植物を観察します。
作成した葉脈標本に色をつけて
オリジナルのしおりを作りましょう。

ブース発表　10/12(土)

TIME	プログラム
11:00 ～ 11:40	**ポスターセッション①（3校）** **愛知県立豊田東高等学校** 「豊田東高校のESD活動」 オーストラリア姉妹校派遣などの国際理解教育活動およびボランティア活動など地域連携教育活動の報告 **中部大学第一高等学校** 「香りの創造－地域の風景を香りで再現する試み－」 地域の自然廃材から抽出した香りのブレンドから地域のブランドイメージを創造する研究報告 **名古屋経済大学市邨高等学校** 「平和の架け橋プロジェクト2024」 国内外の企業やNPO等の専門家から学んだ国内外の高校生が連携して行っている国際平和貢献活動の報告
13:20 ～ 14:00	**ポスターセッション②（3校）** **愛知県立豊田東高等学校** **中部大学第一高等学校** **名古屋経済大学市邨高等学校**

ユネスコスクールブース

成果物展示

成果物展示

ワークショップ

ポスターセッション

ポスターセッション

交流会プログラム〈メインステージ〉　10/12（土）

TIME	プログラム
15:15	**開会行事**（主催者挨拶） 愛知県教育委員会 教育改革監　髙木 健一
15:20 〜 16:10	**ユネスコスクール活動発表** **中部大学第一高等学校** 「Make Aichi Accessible & Fermentation Culture × Gibier」 グローバル系の二つのプロジェクト「Accessibility」&「Gibier」に関する研究活動報告 **名古屋市立北高等学校** 「北高ユネスコ委員会 1年間の取り組み」 北高ユネスコ委員会によるSDGs活動報告 **名古屋経済大学市邨高等学校** 「平和の架け橋プロジェクト2024」 国内外の企業やNPO等の専門家から学んだ国内外の高校生が連携して行っている国際平和貢献活動の報告 **名古屋大学教育学部附属中・高等学校** 「アジアの中の日本」 ユネスコスクールの活動の一環として、名大附属の生徒がアジア3か国を訪問。そこで感じたアジアの中の日本についての報告 **愛知県立愛知商業高等学校** 「ミツバチがつなぐ未来〜地域と環境を守る取り組み〜」 愛知商業高校ユネスコクラブが行った活動内容についての報告
16:10 〜 16:45	**ディスカッション**（発表者と参加者によるディスカッションなど） アドバイザー：奈良教育大学教育連携講座 准教授 ESD・SDGsセンター 副センター長 及川 幸彦 氏

ユネスコスクール活動発表

ユネスコスクール活動発表

ディスカッション

ユネスコスクール活動事例集　第12集

2025年3月発行

愛知県教育委員会あいちの学び推進課

〒460-8534 名古屋市中区三の丸三丁目1番2号

電　　話 052-954-6780（ダイヤルイン）

ファックス 052-954-6962